
悪魔王ナノガイガー 第四部・決戦編

かがみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔王ナノガイガー 第四部・決戦編

【Nコード】

N0674T

【作者名】

かがみん

【あらすじ】

悪魔王ナノガイガーシリーズ 完結編です。

ブローグ 出撃

払曉の空に、曙光が射した。
透明な、澄んだ色の光である。

——機動勇者隊の会議が行われてから、五日が過ぎていた。
この間、懸念されたソール11遊星主の再襲は全くなく、その行動は管理局の監視網にも観測されなかった。
そのおかげか。

はやてはどうか、攻勢準備を完了させることが出来、ほっとした
思いで朝を迎えている。
態勢を整えた機動勇者隊は、双つの部隊にまとめられた。

一つは、ピサ・ソールを攻める管理局艦船アースラを主力とする部隊。
もう一つは、遊星主旗艦ピア・デケム・ピットを牽制する、赤の星

の戦艦ジェイアークを主力とする部隊である。

ジェイアーク艦長、ソルダートJにはまた、ピア・デケム・ピット
に捕われたアルマ・戒道幾巳の救出も目的の中に含まれていた。

そうして、五日目の午後、ミッドチルダの管理局地上本部で打ち合
わせを済ませ、翌朝部隊は出立と相成った。

「やっと戦える……ヴィヴィオを取り返すための」

高町なのはの心境を偽らずに記せば、このようになる。
が、隊長である彼女が公的な場で私欲を優先させるような発言をすることはない。

エースとして、遊星主の野望を阻止し「全てを守る」ことが任務だと心得ている。

母の顔を封じて、管理局の魔導師を貫いた態度を取っていた。
ただ、幼なじみのフェイトだけは、彼女の胸の内を読んでいる。

「大丈夫、きっと、ヴィヴィオは無事に助けられるよ」

別れる前、フェイトはなのはにそう囁いた。
なのはは小さく頷き、微かに微笑んだ。

次元空間航行艦船・巡航Ⅰ級8番艦アースラ（正確にはアースラ改）には、なのは、凱、そしてスターズ分隊・ヴィータ、スバル、ティアナ、シャマル医師が搭乗する。艦長はJS事件に引き続いて、はやてが指揮する。副官にはリンフォースIEIが就く。
オペレーターにアルト、パイロットはルキノが担当する。

一方。

超弩級戦艦ジェイアークには、フェイト、護、ルネ、ライトニング分隊・シグナム、エリオ、キャロ、シャリオが乗った。

ソルダートJと生体コンピューター《トモロ》が艦体制御を統括して行っているため、アースラのようにオペレーター人員はいない。
かわりに戦闘要員である武装隊が数十人、フェイトの指揮の下乗艦している。アースラの方も同様であった。

このあたりは、次元航行部隊の標準に則った配置にしてある。

「よし。全員乗り込んだな」

はやては艦長席に腰を沈め、最新状況をチェック。

部隊は次元空間での戦いを想定して、二艦にそれぞれ四隻の艦船が付き従っている。この、二個の分艦隊が作戦遂行にあたるのだ。

「じゃあクロノくん、あとは任せたよ」

「ああ。気をつけていけよ」

次元航行船クラウドディアのブリッジから、クロノ提督が返してきた。クラウドディアはいま、第一世界ミッドチルダの衛星軌道上にいる。そこから、旅立つ艦隊の姿を見守っていた。

ミッドチルダの守りをクラウドディアに委ね、アースラ、ジェイーク率いる部隊は、遊星主の基地たるピサ・ソールに向けて出撃を開始しようとしている。

それより少し前。

獅子王凱は、未だ昏睡状態にある卯都木命を見舞っている。

「それじゃあ、俺、行ってくるよ。……帰ってきたら、起きてくれるといいんだけど、な」

凱は恋人に口づけを与えると、決然とした表情で、聖王医療院の病室を後にした。

それから。しばらく時が経ったあと。眠る命の額に、星の様な煌めきが輝いていた事を、凱は知る由もなかった。

「発進」

部隊は遙か次元の海の彼方——物質復元装置・ピサ・ソールを目指して出立した。

奇襲作戦では速やかなる攻勢が必要となる。それには、ジェイアークのES兵器を用いたエスケープ空間を経由した攻撃が最適と決められた。

緊張感を孕んだまま、艦隊は飛ぶ。

目標地点まで、艦隊は極めて隠密を心掛けて進んでいった。
だが。

ミッドチルダを少し離れたところで——

「巨大物体、接近！」

「ソルダート」、この反応は……ピア・デケム・ピット！」

「来たか！」

「やはり、うちの行動を読んどったか？」

威容を現した、飛行空母ピア・デケム・ピット。
アースラを邀撃するような進行である。

これまで何の音沙汰もなかったのが不思議だったのだが、ついに動き出したようだ。おそらく、密かに管理局を監視していたのである。連中がおとなしく静観を決め込むはずはない、と、これははやての思っていたことである。

彼女等には預かり知らぬことであつたが、実は遊星主は、本局で失った戦力を復活させ、地上への大攻勢を仕掛けるつもりだったのである。

その用意が整うまで、彼らもまた、管理局と等しく日数を要したというわけだ。

そして、アベルはミッドチルダを破壊し、ジュエルシードを用いた儀式を執り行う所存である。

こうして。

ミッドチルダ防衛を懸け、ソール11遊星主と機動勇者隊との間に、戦端が開かれた。

ブログ 出撃（後書き）

かくして、最終決戦が始まります。

更新までしばらくお待ちください（仕事が忙しくなかなか書けませんがお許しの程を……）。

第一章 希望のアースラ

赤の星で産まれた艦たちの戦いは、ES兵器の応酬よりスタートをきった。

「J!」

超弩級戦艦ジェイアークはアースラの身を庇う様に軌道を変え、敵の巨大な飛行空母ピア・デケム・ピットと応戦した。
ソール11遊星主の旗艦ともいえるピア・デケム・ピットは、ジェイアークにも匹敵するほどの戦闘能力を有する。

「こいつの相手は、私が引き受けた!」

Jは創造主・アベルと対決する意思を告げた。

ESミサイルが互いの艦体から発射される。空間跳躍能力を持つこの兵器は、エスケープ空間を通過する事で、ミサイルは障害物に邪魔されずに目標を直接、爆破できるのだ。

光爆の連鎖が、闇の世界を鮮やかに照らしだす。

それは美しくも戦慄を伴う光景だった。

強力なジェネレーティングアーマーと自己修復力があるピア・デケムとジェイアークはさほどのダメージを受けずに軽く済んだ。しかし、はやてが指揮するアースラ等、管理局の次元航行船は防戦一方であり、被害もあつたようだ。

「反中間子砲！」

主砲斉射を」は指示した。

アベルもまた、ピア・デケムに次の攻撃を命じた。

「小型艦載機を出しなさい！」

空母の甲板から、夥しい数の艦載機が飛び出してきた。

これは無人で動く兵器であり、ピア・デケム・ピットは内部でこれを無限に生産する事ができる。ジェイアークは、反中間子砲、十連メーザー砲を駆使して撃ち落とそうとした。

ガジェット同様、感情なき兵器ゆえに、我が身の大破を顧みることない体当たりを仕掛けてくる。ジェイアークの迎撃により次第にその数を減らしていくが、殲滅には時間がかかる。

「はやて、早く……ピサ・ソールに向かえ！」

」は後方で防御陣形を取るアースラに言った。

「アベルは私が倒す。貴様は一刻も早く、ピサ・ソールを……」

アースラと他の管理局の艦艇は、特に武装を施してはいない。もと

もと、管理局には戦艦という概念が希薄である。古代ベル力ならいざ知らず、現代のミットチルダには質量兵器を抱える理由がない。

ただ、アースラには魔導砲・アルカンシエルが装備されている。これは対象を完全に殲滅するためのもので、過去に《闇の書》の防御プログラムを破壊する等に使用されていた。

強力すぎるため、おいそれとは使えず、管理局より許可が下りないと発射できない。

例えば、GGがバイオネットの獣人にゴルディオン・ハンマーを振るえないのと同様に、対生物に使うのを暗黙的に禁じられていた。また、チャージにも時間がかかる。

ピア・デケムに放つても、威力が大きすぎて、人質となった戒道幾巴やヴィヴィオまで消滅させてしまうだろう。

むしろ、それはピサ・ソール破壊に使うべきだ。

アースラには、それ以外にも対ピサ・ソール用の装備が積まれている。

「ここで貴様らができる事など、たかがしれている」

いささか、辛辣な口調ではやてに言う。

「ピア・デケムを抑えるのは、私とフェイトに任せてもらおう！」

「わかった」

はやては頷き、艦隊に全速力でピサ・ソールの方向を目指すように指令する。

「ピサ・ソールに向かうつもりですね。なれど……」

アベルは、控えていた遊星主たちに出動を命じる。

「我等に刃向かう愚かな連中を、撃破してくるのです！」

ピルナスを除いて、一言も発さず、遊星主たちが次元の海に乗り出す。

艦外に出た遊星主はパーツキューブで移動し、滑る様に管理局艦隊に近づく。

「敵襲来ます！」

はやてのいるブリッジに、ルキノの緊張した声が響いた。

「臨戦体制」

「ソールウェーブ発射」

パーツキューブから、無限情報サーキット・ラウドGストーンのパワーを集めたエネルギー波が放たれた。

「……」

船体を守る防御フィールドを最大にして、アースラは攻撃に耐えた。だが、これでは手足を封じられたも同然。反撃が必要だった。

「俺が出る！」

獅子王凱は素早く立ち上がると、船外への転送を頼んだ。

「俺ならいける!!」

通常の魔導師ならば、フィールド系の防御魔法を使っただとしても、次元の海での活動は危険が付き纏う。いかに、高ランク魔導師であつても人間にはかわりない。無重力、空間の歪み、人体に有害な物質や放射線……万が一、魔法で対処しなければ一貫の終わりである。

だが。超人エヴォリユダーなら、話は別だ。

生身でありながら真空の宇宙で自由に動ける、強靱な肉体。そして全身の神経がネットワークを形成した特殊な生体能力。かてて加えて、今は魔法もある。

凱なら、船外でも遊星主と戦えるだろう。

「僕も行くよ」

天海護も名乗りをあげた。

浄解モードになれば、凱と同じく生身でも宇宙に出れるのが彼だ。しかも、サイコキネシスなどの超能力が使える。

「宇宙での戦いなら僕にもあります。凱兄ちゃんと一緒に戦わせてください」

「よっしゃ、あんたたちに任せるわ」

はやては手早く断を下し、二人を次元の海に転送した。

「短時間なら、私たちも外で戦えるよ」

と、高町なのはが進言したが、

「たぶん、うちらでもいけるやろうけど……ここは奴らの得意なフィールドや。万が一。こんなところで切り札を失ってしまったら……」

はやては唇を噛んだ。

「隊長、ルネさんが……」

「消えた？」

Gストーンサイボーグ・ルネ・カーディフ・獅子王は、このような時におとなしくしているようなタマではない。

シャッセルでは独断専行をよく注意されていたが、ここでもその性格を発揮している。

こうと思ったら許可も待たずに動いてしまう。

それは地球を離れる前、オービットベースにおいても見られた事だった。

サイボーグである事実が無茶な行動を起こさせるのか……ルネは魔法の助力もあつてか、熟慮もなく、ハッチからアースラの外に出た。

（今度こそ、遊星主をぶっ潰してやる——）

ルネの姿に、凱は驚いたが、戻れとも言えず、共に遊星主と戦おうと決めた。

少し離れた宙域では、ジェイアークがピア・デケム・ピットと交戦している。

やがて、パーツキューブに乗った遊星主が迫って来るのがアースラから見えた。

遊星主……ピーヴァータ、ポルタン、ペルクリオ、ピルナス、ペチ
ユルオン等と、凱、護、ルネ達が一進一退の攻防を続けている。
ジェイアークはピア・デケム・ピットの小型艦載機の群に苦戦して
いた。

戦闘中、遊星主達は突如、向きを変え、後退をはじめた。

（逃げる……！？）

戦力差では、あちらの方が有利なはず。
それなのに、彼らは相手から離れ、逃走としか思えぬ速度で去って
いく。

「逃がすかよ！」

魔力で加速したルネが、遠ざかるピルナスを追う。

凱と護も、逃げた遊星主を追いかけた。

遊星主たちは、高速で闇色の空間を駆ける。

その軌道は当初ばらばらであったが、次第に向きを相転じて、同じ
方向へと一直線に加速していった。

「ミッドの方に向かって……！」

罨か？、と凱が思った時には、すでにアースラからかなり引き離されている。

アベルはにやり、とほくそ笑んだ。

「首都を襲うつもりか——！？」

はやてはミッドチルダに引き返すべきか、逡巡する。

「私たちの役目はピサ・ソールを破壊することよ、はやてちゃん」

なのはの言葉は、叱責を含んでいるような気がする。

「迷わず、進むのが……」

戦いを終わらせる早道なのか。

「ミッドチルダにはクロノ君もいる——それに、凱さんたちも追っている……」

地上には、留守を守る部隊も警護を厳しくしているはずだ。

それでもはやての不安は消えなかった。

そこで、増援として、スターズ・ライトニングの精鋭をミッドチルダに送ることにした。

ピサ・ソールの方は、ギャレオンが居ればなんとかなるだろう。

「スバル、ティアナ、ヴィータやシグナムと一緒に地上を守って」

「お任せください！」

声高く、胸を張って彼女達は答えた。

艦艇の一隻に移り、急いでミッドチルダに飛ぶ。

一方、Jも、キャロとエリオに同じ事を命じていた。

「おそらく、地上でジュエルシードの儀式を行うのだろう……」

Jはそれを阻止しなければならない、と強く言った。

「わかりました。僕たちが必ず儀式を止めてみせます！」

J S事件で逞しく成長したエリオが頷いた。

「よし、私について来い！」

シグナムが二人を促す。

「テストロッサ、そいつの相手とピサ・ソールの方は任せたぞ」

「ええ。地上の平和を頼みます」

そう告げるフェイトはみんなの勝利を祈りながら、敬礼した。

遊星主はただならぬ速度で、ミッドチルダに向かっている。
それを部隊を乗せた艦艇は猛迫した。

「アースラも急ぐで！」

はやての号令の下、艦は出力を上げる。

その行方を妨害する様に、ピア・デケム・ピットが立ち塞がるうとした。

「ここでジェイアーク共々破壊してあげます……！」

アベルは攻撃の激しさを増した。

「貴様の相手は私だという事を忘れるな！」

白き戦艦は苛烈な反撃を敵へと食らわせる。

「お前達はピサ・ソールへ……！」

「わかってる。アースラ最大艦速……！」

「さあ、アベル。決着をつけてやるぞ！」

「は不敵に叫んだ。

「懲りない人ですね」

アベルの冷笑は崩れない。

「徹底的な敗北を与えてあげましょう……創造主の手で……！」

冷徹な瞳に、黒い炎が一瞬、踊った。

「ギガ・フュージョン……！」

ピア・デケム・ピットは、アベルの命令により変型していく。

「ピア・デケム・ピーク!!」

超巨大ロボットへと変わったピア・デケムは、ジェイアークに鉾先を向ける。

「ふっ……望むところ」

「は遠ざかっていくアースラ分隊の姿を確認した。

「勇者よ、行くがいい……希望とともに——!」

「J、ピア・デケムが……」

フェイトの声に頷き、Jはペンチノンに言った。

「こちらもフュージョンするぞ」

「新しい機能を試すのか!？」

「ああ……!」

対遊星主戦のために組み込まれた新機構を、いま、試してやろう。
Jはフェイトを振り返った。

「いくぞ、フェイト」

「ええ——」

フェイトがバルディッシュを取り出す。

「見せてやろう、アベル。ジェイアークの新しい力を、な！」

ジュエルジェネレーターの出力が上昇した。

「何をするつもりです？」

怪訝そうにアベルが呟く。

「雷光よ、不死鳥に――」

「新たな翼を与えよ――」

重なる、力。

「バルディッシュ!!」

《Fusion Mode・GetSet》

二人がいるブリッジを……いや、超弩級戦艦自身を、まばゆい金色の輝きが包み込む。

「こ、これは？」

瞠目するアベル。

「いつものフュージョンではない……!?!」

」と、バルディッシュを構えたフェイトが手を握り合う。

そして、跳躍した。

「テラ・フュージョン！！」

宇宙最強と謳われる戦艦が、姿を変える。

不死鳥は、金の閃光をまとうて復活したのであった。

「ゴッド……ジェイダー！！」

第一章 希望のアースラ（後書き）

ぶつかり合う、ゴッドジェイダーとピア・デケム・ピーク……！

次回、第二章「雷光の戦士」に続く！

第二章 雷光の戦士

……かつて。

ヴォルケンリッターと初めて干戈を交えた際、《魔導師の杖》と《閃光の戦斧》は手酷い敗北を喫した。その時、デバイス達は二度と主を傷つかせまいと、ある決意をした。

さらに速く。さらに強く。護るために。

当時、一部の者のみに受け継がれていた、古代ベルカ式の技術。カトリッジ・システム。

それを自らの意思で自分達に取り入れさせたのだ。

そうして新生したデバイス達は、極めて強力な力を発揮するのだった。

それから、デバイス達は戦う度に進化し続けてきた。

今度もまた……。

バルディッシュ・アサルトは、レイジングハート・エクセリオンに続いて、Gストーンを組み込んだ新しいデバイス《G式》として生まれ変わった。

新しき名は、バルディッシュ・ダイナスト。

Gストーンの特性として、機械との親和性が挙げられるが、Gスライドをデバイスに組み入れたことにより、レイジングハート同様のフュージョンが可能となった。

フュージョン・モードに移行したバルディッシュは、フェイトの防護服を生機融合に適したものと改変する。

黒を基調にした、フュージョンジャケットの胸元に、バルディッシュが金色に輝いていた。

『テラ・フュージョン!!』

ソルダートJとフェイトの声が重なる。

ジェイアークは、ジェイバードとジェイキャリアーに分離、同時に変型しながら合体を果たす。

通常と変わらぬ、ジャイアントメカノイド・キングジェイダーの合体プロセス。

だが。

それにより誕生したのは、いつものキングジェイダーではなかった。

フェイトがフュージョンしたことで、魔力運用が可能となり、バルディッシュもジェイアークのシステムにも干渉できるようになった。バルディッシュは己の形態変型機構プログラムをペンチノンにインストールし、キングジェイダーは戦闘状況に合わせた変形を獲得。そしてさらに、GストーンとJジュエルの共鳴で発生する莫大なエネルギーが、キングジェイダーを強大に進化させていた。

王を超え、皇帝を超え、神へ生まれ変わる、その威容――

巨神ゴッドジェイダーがここに降誕した！

白と黒の機体に、まばゆい黄金の光が混ざり合う。

右腕部はレプリファイガー戦で失ったジェイクオースに替わって、ジェイストライクが装備されている。それは、金色の鎗といった風情の武装だ。

背には、輝く赤焰の翼。巨神は悠然と四枚からなるその翼をうち振るわせる。

（力が……）

（湧いてくるっ！）

GとJの共振現象が、無限大ともいえるパワーを二人に与える。

闘志が充満したサイボーグと魔導師は、喫と、アベルに視線を向けた。

「どんな改造を施したか知りませんが……それでこのピア・デケム・ピークに克てるとも――」

一瞬の動揺を沈めてアベルが攻撃を命ずる。

「この世界の塵と化しなさい！」

ピア・デケム・ピークはこの敵に強力な重火器を全て撃った。

「バルディッシュ！」

《Defensor》

すかさず、《ディフェンサー》を発動。ゴッドジェイダーの前に展開したそれは、通常の数百倍の大きさを誇っていた。

G式デバイスにより変換される魔力量は、人間単体を遥かに越えたものだ。

故に、普通の魔導師では扱えぬ、効果を拡大した魔法が操れるのである。

光の爆発がゴッドジェイダーを覆い隠した。

「効きませんか……」

ミサイルとビームによる攻撃は防がれた。

ならば、と、アベルは格闘戦に打って出る。

だが、それこそ、ゴッドジェイダーの思う壺だった。

「うつ！？」

突然——アベルにはそう思えた——ピア・デケム・ピークは衝撃と共に吹っ飛んでいた。

「どうした？ 我らを倒すではなかったのか」

」には余裕がある。

「な……今のは」

アベルには、ゴッドジェイダーの動きが感知できなかった。
接敵する前に打撃を食らっていた。

「今度はこちらから行くぞ!!」

消えた。少なくとも、遊星主にはそういう風に感じられた。
そして、ピア・デケム・ピークは再び横殴りの一撃を受けてよろめいた。

「ぐわっ……!？」

遊星主において屈指の速度と攻撃力を誇るピア・デケムが、ゴッドジェイダーの動作を見切れない。それは、まさに、闇を裂く稲妻。
その攻撃を回避すること叶わず、一方的に翻弄されている。

「ば、馬鹿な。なんなのです……この力は!？」

愕然とする、アベル。

炎の翼を広げ、ゴッドジェイダーはピア・デケム・ピークの胸を打ち砕いた。

金の閃光と異名を持つ空戦魔導師フェイトがフュージョンしたゴッドジェイダーは、物体加速の魔法を使用できる。音速を凌駕するスピードを手に入れたゴッドジェイダーは、凄まじい猛撃により、ピア・デケム・ピークを追い詰めていった。

「い、いいのですか……このまま攻撃を与え続ければ、アルマの身

も……」

「それは即刻承知だ！」

」の鋭い声が飛んだ。

「アルマも戦士として生まれてきたのだ。敵を倒すためならば、死ぬのは本望であろう……」

（「……！」）

その言葉に、フェイトは驚き、アルマは憎々しげに返した。

「ソルダートが忠誠を誓ったアルマを見殺しにするとは。やはり、貴方は機能が狂っていますね」

「欠陥品の創造主に言われたくはないがな」

「アルマを本当に殺すつもりですか！？」

「ふっ……貴様もろともな！」

ゴッドジェイダーが疾駆する。右腕のジェイストライクを起動。光の槍が放たれる。

ピア・デケム・ピークは砲撃で撃ち落とそうとした。だが、その弾幕を振り払い、ジェイストライクはジェネレーティングアーマーを貫いて、ピア・デケム・ピークの肩を破壊する。

『うわあぁっ！！』

戒道の苦痛に満ちた悲鳴があがった。

「くっ……本当に、アルマを……！？」

アベルは唇を噛む。

戒道は苦しみながらも、「J」の行動を意識の底で讃えていた。

（そうだ……それでいい——J）

メインコンピュータの代わりにピア・デケム・ピットに接続された戒道は、機体に受けるダメージを直接フィードバックされる仕掛けになっている。

その痛みに喘ぎながら、戒道はJの勝利を願っていた。

（僕の事など構わず……アベルを……倒し……て……！）

「J、本気で彼を——？」

「もとより、覚悟の上ではある」

冷厳と、Jは言った。

「だが、それはあくまで最後の手段……」

「じゃあ……」

「この私が本当に、仲間を見殺しにするような者と思ったか？」

「いえ……」

と、答えながらも、フェイトは一瞬でもJを疑った自分を、密かに羞じていた。

（ええい、もう。仲間を信じられなくてどうするのよ！ 私ったら……）

「フェイト。魔法でここからアルマを転移させられないか？」

Jが訊いてきた。

フェイトは眉をしかめ、首を振る。

「うーん……転送魔法なら、私の使い魔のアルフか、無限書庫の司書長・ユーノの方が得意なんだよね……」

フェイトは幾つか、次元転送や転移の魔法を使えるが、それらの補助系魔法はどちらかと言えば不得手なほうだろう。

技術的に細かい調整が必要であり、フェイトといえど戒道のみ転送させるのは難しい。

どのみち、ピア・デケム・ピットにはナンバーズのウーノが乗艦していたのだ。恐らくなんらかの対魔導師用に抵抗策（AMFのような）を講じてあるに違いない。

「では、できないのだな」

得心し、Jは次の質問をした。

「では、奴の動きを止められるか？」

「拘束ってこと？」

あのように巨大な物体に、バインドを使った魔導師が、さて、果たして存在したであろうか。

「それなら出来ると思う」

今のフェイトならば。ゴッドジェイダーから溢れるパワーがあれば。バルディッシュが可能と計算した。

「よし。では奴を拘束してくれ。私は、ピア・デケム・ピークに乗り込む」

決然と、告げた。

「わかった」

虎穴に入らずんば、虎児を得ず。幼い頃に習った故事を、フェイトは思い出した。

「だが、アベルには私がアルマを見殺しにした、と思わせねばならぬ」

こちらの意図を悟られず、ピア・デケム・ピークに侵入するためには、あくまで、アルマごとアベルを攻撃すると見せ掛けねば救出に失敗するかもしれない。

それゆえに」は演技とも思えぬ冷徹さを貫き通した。

「この……！」

ついに怒りをあらわにしたアベルが逆撃を^{はか}図るが、ゴッドジェイダーはものともしない。

ESミサイルと五連メーザー砲に加え、フェイトは無数の発射体を作りだし、相手を牽制する。

「プラズマランサー……！」

数百の発射体から雷光を纏った矢が、ピア・デケム・ピークの巨体を狙った。

「ぐああっ！」

被弾した痛みに、戒道が悲鳴を上げた。

「アルマ……すまん、許せよ」

」は呟き、再度ジェイストライクの発動準備に入る。

「くっ——パルパレーパを呼び戻すのは……間に合わない……」

今頃、パルパレーパはアースラ勢力と交戦中であろうか。

「ライトニングバインド」

かつて。なのはと戦った時、フェイトはライトニングバインドで動きを封じ、フォトンランサーで畳み掛けるといった戦術を選択した。

今回ののは、それをさらに大掛かりにしたもので、雷撃の戒めが巨体を拘束する様は類例のないスケールだ。

「っ……！ 機体が動かない！？」

バインドの拘束力でピア・デケム・ピークは攻撃ができない。そこを、ゴッドジェイダーが撃つ。

「バルディツシュ……！」

ゴッドジェイダーの周囲に幾つものスフィアが生成された。それらには雷が弾け、白熱した輝きを放っている。同時に。

ジェイストライクから数百メートルはあろう雷光の刃が生まれた。

「雷光一閃……！」

——出力最大っ……！！

「プラズマザンバーブレイカー……！」

対《闇の書》事件で使われた、砲撃魔法！

「はぁあっ……！」

「うわぁぁぁ……」

ピア・デケム・ピークの胸に、プラズマを纏った砲撃が叩き込まれた。

その威力は凄まじく、ジェネレーティングアーマーを崩壊させ、堅固な装甲を破砕した。

「今よ、」!

「うおおおっ」

フェイトが魔法でピア・デケム・ピークの一部を破壊し、そこから内部にJが侵入する。そのような計画を二人は立てていた。

飛鳥の如く、フュージョンアウトしたJが飛び出す。
ゴッドジェイダーの操作はフェイトに任せていた。

「ぬおおっ」

砕けた装甲から、ピア・デケム・ピークの中に入る。
目指すは、メインコンピュータールーム。

むろん、ただで通してくれるはずがない。

ミッドチルダに向かわなかった別の遊星主がJを阻止しようと、現れた。

だが、彼らは地上と違い、ピア・デケムの機体を破壊するのを憚り、十分な攻撃ができない。

「Jめっ……」

アベルは不敵な行動を取ったJに、苛立ちを覚えた。

(「J………僕の救出は置いといて、早く………アベルとピア・デケムを………」)

朦朧とする意識のなかで、戒道は自分より遊星主を倒す事を優先するように願っていた。

だが、ソルダートがアルマ守護の誓約を破ることは有り得ない。
」はまず、戒道を救い出してから、ピア・デケム・ピークを完全破壊するつもりだった。

「そうそう、貴方の思惑通りに進めてたまるものですか……！」

アベルは切り札の使用を決めた。

「いいでしょう。貴方がピア・デケム・ピークを破壊したいのであれば、やらせてあげますよ」

ただし。

「ここで滅びるのは私ではなく、貴方ですがね……！」

至急に、アベルはピサ・ソールに命令を送った。さらにはフュージョン中のピア・デケムにも指示を出す。

「ジュエルジェネレーターの出力を――」

ピア・デケム・ピークの巨体からエネルギーの上昇を読み取ったのは、ジェイアークの生体コンピューター《トモロ》である。

「これは……ジュエルジェネレーターが暴走しているようだ」

計測されたデータから、ペンチノンはピア・デケム・ピークの異変を感じ取っていた。

「どういう事？」

フェイトが疑問に思っ て訊いた。

「ピア・デケム・ピークの動力…… ジュエルジェネレーターの出力が上昇が続いている。このままリミッター限界を越えたエネルギー放出を続けると、機体が爆発する」

「つまり……」

「おそらくは、自爆だ」

間もなく、ジュエルジェネレーターはピア・デケム・ピークの制御限界を越えた。

「J!」

フェイトは急いでJを救う手立てを講じた。

「くつ。アベルめ、同じ手段を使うか……」

蜥蜴の尻尾切りだ。

Jと戦っていた遊星主は、アベルの指令を受けて戦場を離脱している。機内に残されたJは、戒道の姿を求め走った。

「アルマにはまだ利用価値はあるので死なせはしません。だが、J-002。貴方はこの場で消えてもらいます」

既にアベルらは撤収する準備を終えていた。

ピア・デケムもフュージョンを解いている。

ピア・デケム・ピークはピア・デケム・ピットに戻っていた。

「くそっ、アルマごと私を……消すつもり、か」

Ｊはアベルが戒道連れて脱出したことを知らぬ。

戒道はピア・デケム・ピットから引き出され、遊星主と共にピサ・ソールに長距離転送されていた。

「このままピア・デケムの抜け殻と自殺などしてたまるか」

メインコンピュータールームに至ったＪは、アルマは連れ去られたと判断。

自らも脱出すべく駆け出す。

その間にも、ピア・デケム・ピットの出力は上がり続け、異様な熱量に包まれている。

ピア・デケム・ピットを自爆させ、逃走。

それは、まさにピサ・ソールを爆発させた時と同じ手法だった。

「同じ手に二度もひつかかるとはな」

自嘲的にＪは呟いた。

ピア・デケム・ピットはもうあと幾許もなく、動力炉の暴走により爆発するだろう。

Ｊを救ったのは、ペンチノンが発したＥＳミサイルによってである。弾頭を外したＥＳミサイルは、しばしば救出用に使われるのだが、この度も見事にＪを助け出した。

「急いでここを離れるぞ！」

ゴッドジェイダーに回収された」は、爆発するピア・デケム・ピットから距離を取るよう指示した。
ジェイアークに戻り、高速で離れる。

ESウィンドウを展開し、短距離ワープでさらに足を稼ぐ。

そして。

ついに、ピア・デケム・ピットのジュエルジェネレーターは爆発した。

超新星爆発にも匹敵する光が、闇を白色に染め上げた。

その余波は空間を伝わって、遠くを飛んでいたジェイアークにも衝撃を与える。

これまで戦闘に預からなかった管理局の艦隊も、衝撃波に巻き込まれて出力ダウンを強いられていた。

「だけど、アベルはピア・デケム・ピットを失っても平気なの？」

「おそらくは、ピサ・ソールで複製させるつもりだろう」

ピサ・ソールを爆発させた時には、その複製を瞬時に作りだし自爆させたが、それはピサ・ソールが側にあつたが故の計略だった。

今回、ピサ・ソールとピア・デケム・ピットは離れすぎていたためか、複製を作って爆発させるわけにはいかなかったのだが、「達に真相を確かめる術もない。

「これからどうする、」

「ピサ・ソールに向かう」

そこにアベルがいる。

はやてにも協力したほうがいいだろう。

「これが最後だ。次こそアルマを奪還し、アベルを倒す！」

「わかった」

フェイトは頷いて、アースラに通信を送った。

事の経緯を報告し、ピサ・ソールに向かうアースラ隊に合流する旨を伝える。

「ここから先はジェイアーク一隻のみで行く」

残りの艦隊はミッドチルダに引き返し、地上部隊を助けるように、と、告げた。

はつきりと足手まといとは言わなかったが、アベルとの戦いでは何ら活躍もできなかったので、指揮官達は敢えて異議を唱えなかった。内心、忸怩たる思いを胸に仕舞い、承服の言をジェイアークに伝えた。

「わかりました。執務官らの武運を祈ります」

敬礼し、分艦隊の航行艦は踵を返してミッドチルダに急進していった。

「我らも行くぞ！」

ジェイアークは加速し、最終決戦の舞台になるであろうピサ・ソールに向かって突き進んだ。

ふと。

この時フェイトは、なのはは——エース・オブ・エースは大丈夫だろうかと、頭の片隅で思っていた。
なのはやはやてたちの前にも卑劣な罠が待っているのではないかと、心配になる。

「負けないで——」

そう、親友の勝利を願うフェイトだった。

第二章 雷光の戦士（後書き）

凱やスバルたち、ミッドチルダに向かった勇者たち。
地上を破壊する遊星主との、激闘が開始される！

次回 第三章「新星部隊対遊星主」へ続く！

第三章 新星部隊対遊星主（前編）（前書き）

執筆遅れました

第三章 新星部隊対遊星主（前編）

次元の海。

遊星主を追って流星の如く加速する超人エヴォリューダーとGストーン・サイボーグ。

そして、緑の星のラティオ。

凱は魔法を使い飛翔するが、遊星主に追い縋ることができたのは、アストロノーツ時代に習得した知識と技術のおかげであつたろう。

一方、ルネはもっぱら直感に頼つての飛行だ。

護の場合は、一年に渡り、三重連太陽系で遊星主と戦い続けた経験からか、追跡も手慣れたものである。とは言え、飛行速度は獅子王の二人よりは遅い。

彼らを振り切るかのように、ソール11遊星主はミッドチルダ目指し飛んでいく。

凱はデバイス《ガオーブレス》を起動。

直射型魔法を放つ。

「ブロウクンシューター！」

なのはのアクセルシューターを参考に編み出した砲撃であり、ブロウクンマグナムと同じ破壊力を持つ。さらに、複数に分裂して敵を撃つことも出来、ヴィータのシュワルベフリーベンに近い形態と言

えた。

自動追尾機能が設定してあるため、逃れるは困難だ。

「いけっ！」

光の弾丸は遊星主を背後から追い、そして、着弾した。

だが、遊星主に目立ったダメージは見えない。

むしろ爆発の衝撃を利用してさらなる加速を得ていた。

遊星主を乗せたパーツキューブが、一気に遠ざかる。

「しまった……！」

悔やむ凱。分裂したために威力が半減していたのか。

遊星主たちはぐんぐんと、ミッドチルダのある方向へと進んでいく。

凱とルネも負けじと加速を強めた。

「は、早い……！」

護は必死に凱たちに追い縋ろうとした。

そんな彼に、はやての命で地上防衛に向かった艦が接近してきた。

護は艦から、転送で地上に直接降下することを告げられ、同行を願った。

防衛部隊を指揮するシグナムは承知して、護を艦に収容した。部隊は、ミッドチルダの衛星にある転送ポートから、地上に降りる考えであった。

ミッドチルダ軌道上。

そこには、クロノ提督麾下の艦隊が連絡を受けて待ち構えていた。防御陣形を敷き、遊星主の進撃を阻止せんと、皆が緊張の面持ちで遊星主到来に備えている。

「来ました！」

「敵・遊星主……七体確認！」

「こちらに真つ直ぐ向かって来ます——」

「よし、アルカンシエル、起動準備……」

管理局にすれば《勝利の鍵》に相当する、魔導砲起動に必要なキイを取り出して、クロノが艦隊に指示を与える。

魔導砲アルカンシエルはそもそも単体のみでも強力な武装だ。管理局の保有する兵器のなかでは最も破壊力を秘めたものといえよう。純粹なる破壊を行うアルカンシエルは、物質そのものを消滅させる。ある意味、管理局にとっては切り札でもある。

滅多な事では使用されぬが、遊星主を倒すため即、許可が下りた。

「遊星主、間もなく射程に入ります！」

パーツキューブに乗った遊星主たちは、円陣を組むかのようなフォーメーションでクラウドディア艦隊に接近してきた。

「アルカンシエル、発射！」

まばゆい光が、艦から放出された。

空間の一点に束ねられた光が、遊星主を飲み込もうとする。

——だが。

目前に迫るアルカンシエルの光にピルナスが婉然と微笑んだ。カインは無表情だ。他の遊星主感情のない顔立ちであるが、余裕のようなものが感じられた。

やがて、光が、彼らに直撃した。

「どうだ？」

ほぼ直撃だ。

普通なら、消滅は免れないはず……

「うつ！？」

クロノは目を疑った。

眼前の空間に、巨大な穴が出来ていた。

「これは……！？」

時を少し遡る。

アルカンシエルが放たれると同時に、一体の遊星主が前に進み出た。彼は右腕を突き出し、力を振るう。

力は、指向性のある重力波だ。アルカンシエルは空間の湾曲により、連鎖的に、百数十キロ内に存在する全てを反応消滅させる兵器である。その破壊の威力は、魔導の器であった《闇の書》の防衛プログラムですら消し去るほど。

それを遊星主——ピーヴァータは、重力波で逆方向に空間湾曲を生させることで反応を弱めほぼ無力化させてしまった。

その結果、GGGのディバイディングドライバーを発動させた時の様な現象が発生した。

ガオガイガーのディバイディングドライバーは、レプリシオンフィールド（反発力）とアレステイングフィールド（拘束力）を同時に励起させ、空間湾曲エネルギーにより見かけ上何も存在しない空間を作り出す。

この場合、擬似的なディバイディングフィールドが遊星主と艦隊の中間に誕生したのであった。

そこを飛び越え、遊星主が攻勢を仕掛けて来る。

遊星主たちは高出力のソールウェーブを集中させて、艦隊に浴びさせた。

艦船が次々に攻撃を食らい、ダメージを負っていく。

「くっ——」

頼みの綱のアルカンシエルが効かないとなると……

「これでははやてがピサ・ソールを破壊する前に、地上が！」
防御陣が壊乱し、遊星主に突破されてしまう。

「だが。それでも……奴らを止めないと——」

ソールウェーブの高熱で爆発する艦の装甲板を見ながら、クロノは歯を食いしばり、呻く様に言った。

数分後。

誰しもが不安と緊張を覚えながら待機していたミッドチルダ地上部隊に、緊急出動がかけられた。

クロノは焦りながらも、地上と連携を取って遊星主に対処する事を忘れない。

地上に自身の部下たち《宙》の魔導師を派遣し、応援させた。オーバーSランク以上の魔導師がいれば、大規模な殲滅魔法で迎撃するのだが、この距離まで突破された以上、下手に大きな力は使えない。ミッドに被害をなるべく起こしたくはないのが彼の考えだ。

「ヴォルケンリッターや、なのはの教え子達も向かってくれている。何とか、持ちこたえてくれ……」

ミッドチルダではすでに市民の避難は完了し、防衛に当たる勇者隊の部隊が遊星主を待ち構えていた。

ミッドチルダの大気圏内に入り込むや否や、遊星主たちはパーツキューブとフュージョンした。

普段はアベルと共にピア・デケム・ピットに居る事が多いピルナスも、巨大な戦闘口ボへと変化する。

フュージョンしないのはカインだけだ。彼の場合、真にフュージョンするのに値するのは、ギャレオンのみなのかもしれない。

パーツキューブに合体して遊星主たちは、ミッドチルダ各地へと散っていく。

破壊活動を開始する。

凱たちがミッドチルダにたどり着いた時には、すでに激しい攻防が

繰り広げられていた。

巨大ロボと化した遊星主を食い止めるべく、追ってきた凱たちが立ち向かう。

緑豊かな景勝の地に、凱と護が降り立つ。

山々に囲まれたそこは、フェイトが幼き日を過ごした地方だった。アルトセイムと呼ばれるそこに、遊星主・プラス、ペイ・ラ・カインが襲来していたのだ。プラスには凱が、カインには護がそれぞれ当たった。

一方、首都クラナガンでは、ポルタン、ピルナス、ペチュルオンが勇者隊と戦っていた。

また、ピーヴァータはベルカ自治領、ペルクリオは港湾地区に巨躯を降ろす。

ミッドチルダ各地は戦場となり、激闘が繰り広げられるのだった。

第三章 新星部隊対遊星主（前編）（後書き）

遊星主と戦う我らが勇者たち。

次回、第五章「新星部隊対遊星主（後編）」へ続く！

第四章 新星部隊対遊星主（後編）

ミッドチルダ南部。

遊星主プラスは長身瘦躯の姿の持ち主であった。

凱に対し、ビームとミサイルで攻撃をしてくる。

防御魔法でそれらを捌きながら、彼もまた攻撃を繰り返した。

「ブラウクン・ファントム！」

撃ち出された緑の光弾が、遊星主に肉迫する。

その軌道を見切ったプラスは、ブラウクンファントムを回避すると同時にミサイルを発射。誘導弾と接触し爆発。光弾が砕け散る。

「たやすく勝たせてはもらえんか……」

凱は闘志を奮い立たせた。

「行くぜ、ガオーブレス！」

獅子の顎が吠える様に、起動音をたてた。

凱はさらなる力を、腕に籠める。

「——勇気の赴くままに！！」

首都クラナガン。高層ビルの屋上に二つの影が立っていた。管理局の誇る、エース・オブ・エースの技を継ぐもの達。短髪の少女スバルとツインテールの少女ティアナ。二人は遊星主の姿を求めて、辺りを見回した。下界を見下ろせば、街の様子は静かだ。市民は安全な区域に避難している為、視界に映る人々は皆管理局に属するものたちばかりであった。

「……おかしい」

「あんなデカブツ、普通なら見失うはずなのに」

魔法の走査にも引つ掛からないなんて……

「——！？」

スバルの目の色が変わる。

「ティア、危ない！！」

「えっ……！？」

とっさにティアナを突き飛ばし、スバルはシールドを発動。飛来した二刀を弾き返した。

「これは……！？」

立ち上がりつつ、驚愕するティアナ。

「出てこい、遊星主」

スバルが叫ぶ。

すると、隣のビルに、空間から滲み出るように巨大な姿が現れた。ソール11遊星主の一体、ポルタンである。

鋭敏に感覚器官を強化されたスバルだからこそ、微かな投擲音に気付くことができた。

ティアナ一人では、危ないところであつた。

「姿を消せる遊星主、か……」

ティアナは対策を練って考え込んだ。

スバルは構えつつ、ポルトンの動きを計っている。

——と、また、ポルトンの姿が消えた。

光学迷彩の一種であるが、魔法でも走査しにくい特殊なカモフラージュである。

しかし。

流石な遊星主といえど、動作音までは消せない。

人では気づかない静穏な動きでも、戦闘機人の強化された聴力なら

……

「そこだっ」

スバルのシールドが、ポルトンの刀を弾いた。

ティアナは、改めて戦闘機人の身体能力の高さに感嘆した。

「スバル！」

「こいつ、でかいくせに、凄く早い……しかもあの巨大な刀。当たればやばいね」

「あんたのISで太刀打ちできないの？」

「いや……」

新たに開眼したスバルの先天技能。
それなら或いは……

「来るっ！」

ポルトンは加速。二人に襲い掛かる。
すでに光学迷彩を解除していた遊星主が、二刀を手にビルを揺るがし踏み込む。

「くっ」

スバルとティアナは跳躍しながらの回避へ。

同時に、ティアナが撃つ。

複数の誘導弾を放つ《シュートバレット》の魔法だ。
四方からの攻撃に、ポルトンは独楽の様に回転して、誘導弾を風船を割る様に全て弾き碎いた。

「ちっ——」

ティアナは舌打ち。

直後、その動きが一瞬静止するのに合わせ、スバルがポルトンの背後から攻めた。

「うおおっ」

至近距離からの《デイバインバスター》！
なのはから受け継いだ一撃必倒の技だ。

白き光が遊星主を打つ。

爆発。

スバルは効いてくれることを祈りつつ、間合いを開けようとする。

（！）

スバルが反応するよりも一段早く。神速で放たれた斬撃が、水平に流れた。横からの一刀はスバルを両断せんと疾る。

「スバル——！？」

遊星主・ピーヴァータの巨大なチェーンソーアームが、高速でシグナムに叩きつけられる。

騎士はレヴァンティンで切断の力を受け止めた。

火花が散り、そのパワーの前に、さしものシグナムも押され気味となる。

「ぬう……」

汗が額を伝う。

カートリッジ二発分の魔力を消費し、チェーンソーを『斬る』事を図ったが、逆にレヴァンティン自身に負荷がかかるばかりだ。このままでは、埒があかぬ。

刃をチェーンソーからずらし、シグナムは展開したバリアでチェー

ンソーを受け流した。滑る様に体を移動させた彼女の横を、チェー
ンソーアームが轟音と共に振り降ろされる。すぐさま鋸の腹を蹴り
跳んだ。空中高く離脱していく。

「カートリッジロード!!」

《explosion!!》

シュランゲフォルム。

シグナムは中・近距離攻撃を放とうとした。

そこへ――

「うつ!?!」

パイルドライバーから、ピーヴァータの攻撃が繰り出される。それ
は、アルカンシエルを打ち破った、重力波攻撃だ。

「くおおおつ……!」

重力衝撃波はシグナムを直撃した。重力波フィールドで歪めた空間
の復元力を利用した衝撃波には、距離による減衰は無かった。結界
を張って防いでいるが、守護騎士中、最も防御力が低いシグナムに
は苦しい防戦である。

「く……」

もし結界が破壊されれば、高重力に押し潰されるのだろうか。

「この衝撃波ごと、斬り裂ける力が……あれば」

だが、今は衝撃波から身を守るので精一杯だ。

「はっ……！」

不意に、衝撃波の圧力が消失した。と、思った瞬間。シグナムの正面に巨体が舞っていた。

ピーヴァータはチェンソーでシグナムを打撃する。

「うわあああつ——！！！」

吹っ飛ばされ。

シグナムは大地に叩きつけられた。

海上。

火竜と騎士達を阻む見えざる波が、鳴り響いていた。

ペルクリオは『音』を武器とする遊星主である。

超音波振動によって、目標となる対象を破壊するのがその能力だ。原理的には、GGのマイク13のソリタリーウェーブと同根であり、また、ソムニウム戦闘形態ベターマン・ネブラの必殺技「サイコ・ヴォイス」も同じ効果があった。むしろ、ネブラの能力を元にGGが開発したのがソリタリーウェーブと言えよう。

ペルクリオには専用オプションとして、ブルブルーンが付いている。ブルブルーンはペルクリオの『音』を増幅する、鯨形の巨大遊星主であった。

その『演奏』に、キャラが結界のフィールドで必死に耐え続けている。

「頑張つて、キャラ！」

赤毛の少年、エリオは槍型のデバイス《ストラダ》を手に、歯痒い感情を抱いていた。

フリードリヒの背に立ち、構えているものの、彼にはペルクリオの『音』に対抗する攻撃技が思いつかないでいる。

フリードの火炎も、酸素原子を粉碎される事で無効化された。接近戦に持ち込むにも、ペルクリオのソリタリーウェーブが有る限りそれも難しい。

『だけど、このままじゃ……』

ケリユケイオンに最大限の魔力を注ぎ込み、ひたすら結界の維持に集中するキャラの表情に、疲労の色が浮かびはじめた。

『指をくわえて見てるだけなんて――』

ギリ、と奥歯を噛む。

一方、キャラはソリタリーウェーブから仲間を守りながら、アルザスの守護竜・ヴォルテールを召喚する方途を考えていた。だが。いかにヴォルテールといえど、遊星主に勝てるのか彼女には自信がない。

だが、それでも――

（エリオ君やフリードを……！！）

その時。硝子が割れる様な、乾いた音が響いた。

（えっ――！！？）

「まさか……」

「アギヤ！？」

結界が、砕けた。

「魔法を……超音波振動で分解した！？」

驚愕している余裕は無かった。ソリタリーウェーブがエリオたちに襲い掛かってきた。

「うわあっ――！！」

「きゃあっ……ケリュケイオン！」

凄まじい痛みにさらされながら、キャロは無理を承知でデバイスに願う。

「みんなを守る……力を！」

直後、複数の水しぶきが巻き上がった。

ミッドチルダ西部・エルセア地方。そこは山や林に囲まれた景勝の地であったが、いま、ここを局地的な暴風雨が荒れ狂っていた。遊星主・ペチュルオンが起こした電磁竜巻のせいである。

吹き荒れる風の中、ヴィータは無言でペチュルオンの巨体を見上げていた。その視線は冷徹で、鋭い。

電磁竜巻は、遊星主の腕にある巨大な電磁石とスクリューを高速で回転させて生み出しているようだった。

将であるシグナムよりも防御に優れたヴィータは、魔法で完全に電磁竜巻の影響を防いでいる。

ならば。ここは、攻勢に出るのみだ。

「ぶち抜く――」

くろがねの伯爵が主に応えるように、カートリッジを排夾する。

グラーフアイゼン

「いくぞ、アイゼン！」

《Jawohl!!》

跳ぶ。

「一気に……真上に!!」

加速。飛翔したヴィータは、電磁竜巻の上に。

空中から暴風雨の中心、「台風の目」に当たるぽっかり穴の開いた空間を見た。そこに発生源たる遊星主がいるのだ。

頭上から、攻撃を加えれば、電磁竜巻もガードの意を為さないはず。

「はあっ！」

複数の鉄球をハンマーヘッドで撃ち出す、ヴィータの必殺技が放たれる。

大気を突き破る音が鳴り。

赤い魔力光の尾を引いて、鉄球が飛ぶ。

ペチュルオンの無防備な頭へと向かう。

「うつ……！？」

だが。

遊星主は腕の向きを変える。

竜巻が、上空にいたヴィータに向かって牙を剥いてきた。

顎を開いた竜の様に、獰猛な渦がヴィータを飲まんとする。

鉄球は電磁竜巻により、威力を削がれ、イオンパルスの衝撃をも食らって破碎された。

「うあああっ！」

ほとんど音速に近い速度で、嵐の竜が襲い来る。深紅の騎士は電磁竜巻によって動きを封じられ、稲光が舞う激しい渦に翻弄された。

「ぐあっ……！？」

やがて、竜巻の顎から吐き出されたヴィータは、凄まじい勢いで地面に投げ出された。

ぬかるみが騎士服を汚した。

グラーファイゼンに縋り付きながら、ヴィータが立ち上がる。

「畜生……てめえ」

その瞳に燃える闘志は衰えるどころか、逆に熱量を上げたようだった。

「今度はその電磁竜巻ごと、てめえをぶっ潰してやる」

グラーファイゼンをカートリッジ・ロード。

「なのはの為にも、てめえは必ず倒す!!」

ミッドチルダ東部、かつてスカリエッティのアジトが存在した山嶺が見はるかす一帯。

緩急のある丘陵が連なっている地帯があり、その上空を飛ぶ人影があった。

ジグザグとした不規則な飛行は遊星主ピルナスであり、それを追って空を翔けるのはルネ・カーディフ・獅子王である。

針や鞭、火炎がピルナスの攻撃であり、ルネは魔力を帯びた拳と蹴りが武器だ。

だが、機動力に優れたピルナスに打撃を当てるのは難しい。

魔法の砲撃を撃ったみたが、直線的なビームでは簡単に回避されてしまう。

飛行魔法に未だ慣れぬことも、ルネが焦る一因である。

(くっ……ちょこまかと)

微笑しながら鞭を振るうピルナスに、ルネは苛立った。

さらに。

「ふふふ……子猫ちゃん、貴女との追いかけてこも飽きてきたし、そろそろ本気でぶち殺してあげるわ」

「なんだと！」

怒るルネの前で、ピルナスが叫ぶ。
それは融合の合図。

「フュージョン！」

パーツキューブを召喚、一体化していく。

「うっ、これはパルパレーパ達と同じ……」

巨大ロボットとなったピルナスは、右腕から針を発射した。

一本だけではない。数百に及ぶ巨針の弾幕である。

ルネはプロテクションを展開して防ぐが、ピルナスが次に繰り出す鋼鉄の鞭により、弾き飛ばされてしまった。

「ぐおおっ」

丘の斜面にサイボーグボディがめり込んだ。

「うつつ……」

たたき付けるように、ピルナスは炎熱の帯を放つ。
赤い光が周囲を照らし。

爆発が起こった。

豊かな自然が色づくアルトセイム地方。
そこに、大きな窪地があった。その窪地の底に対峙する大小の姿がある。

ペイ・ラ・カインと天海護だ。カインは無表情で立ち、護は決意を秘めた瞳で遊星主を見返している。

二人は知らなかった。

かつて、この地はフェイトが幼少を過ごした思い出の土地だということ。プレシア・テストロッサが真実の母だと信じ、魔導師となる訓練に一生懸命だった時代の記憶が染み付いた土地だということを。

窪地にはその居城たる「時の庭園」がそびえ、フェイトとアルフが成長した場所である。だが、それも、時空の彼方に於いて崩壊し消え去った。フェイトの母と姉を道連れに……

フェイトの思い出と、そして哀しみを遺したこの場所で。

緑の星の守護神と、そのオリジンの息子に生まれた少年がぶつかり合う。

「ラティオよ……」

厳めしく語りかけてきたペイ・ラ・カイン。

「本当に父である私と戦うつもりか？」

問い掛けと共に、彼の額から光が灯る。

逆転したGの紋章。

遊星主の力の源、ラウドGストーンの輝きだ。

「故郷である三重連太陽系を見捨て、下等な世界をそなたが救うというのか？」

「黙れ！」

あの、温厚な護が珍しく、語気荒く声をたたきつけた。

「あなたは僕のお父さんじゃない！」

そうだ……目の前の男は真の父ではない。アベルがオリジンのカインの人格を抽出して創りあげた操り人形だ。

アベルの命令に従い、プログラムの通りに行動する人形……。

「プログラムにすぎないあなたが……カインを騙るな！」

護は凱からカインについて、どれだけ高潔な人物であったか、聞かされていた。生前ついに見えること叶わなかった、父について。

（カインは……地球を滅ぼすより地球と共存しようとした。次元世界を滅ぼしてまで三重連太陽系を再生させようとする遊星主とは違

う！)

それは、Gクリスタルの「マザー」から聞かされた事実だった。

滅亡が近づく三重連太陽系において、赤の星はギャレオリア彗星――次元ゲートの彼方の宇宙から暗黒物質を取り寄せ、宇宙の収縮を止めようとしていた。三重連太陽系は生きながらえることができるかわりに、暗黒物質を持ち出された宇宙は、滅亡を速めてしまう。GGが遊星主と戦う理由はこれに起因する。

三重連太陽系の復活を求めれば、結果的に別の宇宙の消滅に繋がるのだ。

一方、緑の星は全く逆の考えを持っていた。

カインは滅びゆく三重連太陽系から、次元ゲートの彼方の宇宙に移住する道を選択していたのだ。

先住民と共存し、三重連太陽系の文化を継承していく……

だが、アベルやカインの計画も、紫の星で開発されたZマスターシステムにより瓦解する。

暴走したZマスターは三重連太陽系を機界昇華に導き、滅ぼした。

そして次に、次元ゲートの彼方へと侵攻し地球の機界昇華を狙った。それからは、ガオガイガーと共に戦った護の記憶に新しいところだ。

「ふつ……そこまでこの世界に肩入れするのならラティオよ。そなたが仲間と呼ぶ者達共々、討ち滅ぼしてやろう」

カインはいきなり、ラウドGストーンの衝撃波を放った！

「くうっ」

ズン、と防御する護の体に、重たい衝撃が伝わる。

「創造神に逆らう罰を食らうがよい」

アベル……彼にいくら僕を動揺させるために喋らせても……僕の勇気は砕けないよ！

『勇気さえあればGストーンは必ず俺達に力を与えてくれる』

……それが勇気ある誓い。

「だから、負けない。ペイ・ラ・カイン」

護の額にGストーンの紋章が浮かんた。真逆ではない、正しく、真の勇気ある者の証たる紋章が。

「勇気があればきっと、GストーンはラウドGストーンを凌駕する
……」

「ラティオオオオ!!」

カインは破壊の力を解放する。それを護は防御の力で受け止める。

このパワーに耐え切れるか、ラティオよ!?

「うおおおおっ！」

ほとばしる緑の輝き。

護の力が、カインの力を押しつけていく。

「ぬ？」

人形であるはずのカインの瞳に、驚愕が走った気がした。

「はあっ！」

護はついに、カインの力を押し返した。

「ぐあっ」

カインは跳ね返ってきた己の力によって、吹き飛ばされる。

「ラティオっ」

だが、まだ致命的なダメージを与えたわけではない。

カインは護に容赦ない攻撃を仕掛けようとした。

「碎けるがいい……ラティオよ」

「あなたには、絶対に勝つ！——本当の僕のお父さんのためにも
！！」

地上で戦いが繰り広げられている頃。

アースラもまた、ピサ・ソールへ向けて着々と進んでいた。

だが。

進路の先には、妨害が待ち構えていた。

「よくここまで来たな……時空管理局の者達よ」

自らを神を宣する遊星主、パルパレーパはアースラの艦首に、その
傲岸なる笑みを見せるのだった。

第四章 新星部隊対遊星主（後編）（後書き）

ピサ・ソールへの道を阻む遊星主の企み。
再び敵として現れた娘に、なのはは――

次回 第五章 母と娘 破壊神を喚ぶものたち！！ に続く！

第五章 母と娘 破壊神を喚ぶものたち！！

闇のなか、金の髪の色がよく目立った。

（なんで――）

胸中、八神はやては嘆息する。

（あともう少しで着くっちゅうのに……）

ピサ・ソールまであと一息という所でアースラは、パルパレーパの妨害に遭った。

立ちほだかる遊星主は無防備な様子で浮かんでいる。

「生憎だが、いまピサ・ソールに近づいてもらうわけにはいかん…
…この場に一人残らず沈むのが貴様たちの運命」

「どんな運命やねん……？」

「神が定めし運命だ」

パルパレーパは冷笑を口端に刻みながら、軽く腕を上げる。

「……フュージョンするんか!？」

パルパレーパはパーツキューブとケミカルフュージョンすることにより、巨大ロボ・パルパレーパプラスとなるのだ。

「貴様らの相手は私ではない。さあ、出てくるがよい……聖王の器よ」

忽然と現れた少女。

長い金髪に、左右色違いの瞳。いにしえの聖王の遺伝子から誕生した、古代ベルカの遺産を継ぐもの。

「ヴィヴィオ!」

聖王の少女は無表情に構えた。ベルカ式の格闘技、シューティングアーツの構えだ。

「さあヴィヴィオ、戦え。貴様を狙う敵と、な」

「あいつ、ええ加減なことぬかしよるわ!」

「……やはり、ケミカルボルトに操られてるんでしょうか?」

ルキノがはやてに訊いた。

「おそらく……護くんが言うには、連中の常套手段らしいわ」

硬い表情ではやてはなのはに視線を移す。

なのははモニターに映るヴィヴィオの顔を凝視している。

「レリックがヴィヴィオの力の源やけど、ゆりかこの内部じゃなければ、聖王の本来の力は発揮できないはず」

あくまで推測にすぎない。

だが、その存在そのものが動揺を誘うものではある。

パルパレーパはヴィヴィオを出すことでこちらの攻撃をためらわせ、戦意を削ぐのが目的に違いない。

「なのはちゃん……」

「部隊長。私に出撃許可を」

「ほんまに、ええんやな？」

確認する様に、はやてが問うた。

「はい」

なのはの瞳に不動の意思が宿っていた。

聖王のゆりかごに挑んだ時、すでに決めていた覚悟。

ヴィヴィオを救う。そのためならば、どんなものとも戦う。たとえそれがヴィヴィオだとしても。

「次元の海の中で戦えるのは、私だけです」

「よし……わかった」

もはや、親友の新しい力に頼るしかない。はやては心に決めた。

「高町なのは隊長の出撃を承認や！」

「レイジングハート!!」

勇躍してなのははレイジングハート・ジェネシスを起動。

《Fusion Mode》

ヴィヴィオもなのはも特殊な防御フィールドを防護服の周囲に展開することで、次元の海で生じる生体への影響から自身を守っていた。

「ふふふ……そうだ。戦うがいい」

パルパレーパは距離を開けて、二人の戦闘を見守っている。
アースラのクルーも、母と娘の戦いに固唾を飲む。

「いくよ、レイジングハート」

なのははいきなり砲撃で攻撃しようとする。
が。

ヴィヴィオは神速で間合いを詰め、なのはに近接技を仕掛けてくる。

「く……速い!？」

「たあああっ!!」

魔力を乗せた拳が急所を襲う。だが、そこはスバルを育てたなのは

だ。

砲撃魔導師ではあるが、近接戦闘の心得もある。
戦技教導官時代の経験がものを言った。

ヴィヴィオの攻撃は速く的確。しかも当たれば大きい。
それを、最小の動作で回避し、受け流す。

「っ……!!」

焦るヴィヴィオ。

一方、なのはは笑みさえ浮かべている。

（どうして笑うの……？）

「ヴィヴィオ」

優しい声がした。

（ママ——）

「いま、ママが助けてあげるからね」

（無理よ!!）

心の叫びは悲痛だった。

（ケミカルボルトがある限り、私は——）

「だから、ヴィヴィオも闘って。遊星主の呪縛と」

「できないよ!!」

泣きそうな声が、ほとばしった。

パルパレーパのケミカルボルトは対象の身体を支配し、自在に操る。レプリジン・護や凱ですらその命令に逆らえずに、仲間と戦わざるを得なかったのだ。ゆりかご崩壊後、ヴィヴィオにかけられたクアットロの暗示は解けていたが、肉体を支配するケミカルボルトの威力は振りほどけそうにない。

パルパレーパに命ぜられるまま、ヴィヴィオの身体は一度は母と慕った女性を攻撃する。

「大丈夫、ヴィヴィオは強い子だから」

「マ……マ……」

「世迷い言を」

パルパレーパは吐き捨てるように呟いた。

「あの、エヴォリユダーがケミカルボルトの影響を免れたのはラテイオがいたからだが……しかし、今、奴はいない。私のケミカルボルトからの解放など不可能と知れ」

「——あああっ……」

虹色の魔力光カイゼル・ファルベが、遊星主の命令に苦しむヴィヴィオを照らし出す。

「ごめんなさい……」

ヴィヴィオはなのはに砲撃を撃ち込む。

幼子の時になのはから収集した魔法。至近距離から放つ《インパクトキヤノン》だ。それを、プロテクションで防ぎつつ、なのはも砲撃を使う。

「!」

《ショートバスター》の直撃は、しかし、強固な《聖王の鎧》によって軽度のダメージしか与えられない。

なのはの最大の持ち味は収束砲だが、機動力に優れたヴィヴィオが相手ではチャージが難しい。ならば。

「チェーンバインド!」

拘束魔法でヴィヴィオを止めるしかないだろう。

「……しまっ」

手足を拘束され、ヴィヴィオは顔色を変える。

「ヴィヴィオ、痛いけど我慢してね」

すでに魔力の収束を開始していたなのはは、ヴィヴィオに微笑みかけた。

「ダメだよ、ママ——」

ヴィヴィオは四肢に魔力を籠める。雷光がまばゆく輝いた。

フェイトから収集した格闘戦用魔法である。

フラスマーム

「はぁあっ！」

チエーンバインドの拘束を雷の魔力刃で切断、自由を得たヴィヴィオは跳びすさりながら増援を呼ぶ。

「ファントムガオー！！」

「な……！？」

一機の戦闘機が闇を裂いて出現した。

「ガジェット……？ いや違う。あれは——」

それは、紛れもなき地球産の機体。——GGGが造りあげた勇者王のコアマシン、ギャレオンに替わるべくして開発されたファントムガオーであった。

しかし、よく見ればその色合いが微妙に異なる事が見てとれるだろう。

第一、ファントムガオーはガオファイガー共々三重連太陽系において、ピア・デケム・ピットに押し潰されたはず……

そう。遊星主は再び、ピサ・ソールに保存されたデータを基にレプリジンを作り上げたのであった。

今回は凱の代わりに、ヴィヴィオが操縦者に使われたのだ——

ハッチが開き、ヴィヴィオを迎え入れるファントムガオー。

「フュージョン……!!」

その姿が揺らいで消える。ファントムカモフラージュによる光学迷彩である。それは変型への合図。

同時、なのはも行動を起こしている。

「ギャレオン——!!」

今一度、あなたの力を貸して!

アースラから飛び出した鋼鉄の獅子が、なのはに向かう。

「フュージョン——!!」

口蓋内部に収容されなのはが、ギャレオンと一体化する。

そして。光学迷彩が解かれ、白き巨人が登場した。
ファントムガオーから人型へ——

「ガオファ——!!」

「ガイガー!!」

よく似た巨人が相対する。その足元には魔法陣が輝いていた。

魔力展開。GSライド・レリックコアとの結合完了。

虹色の光がガオファアから放たれる。

魔法によって、変換された姿。セイクリッド・ガオファア。

ポテンシャルにおいてガイガーを越えると言われたガオファアだが、聖王の鎧や魔法によりさらに強力と化していた。

一方、ジエネシック・ガイガーも変化を開始していた。

魔法による変換で、桜色の翼もつ天使の様な姿へ。

なのはの魔法と勇気が合わさり誕生する、スター・ガイガーだ。

メカノイド同士は変型を完了させ――

セイクリッド・ガオファアとスター・ガイガーが戦いを始める。

「ファントムクロー！」

先に仕掛けたのはヴィヴィオのほうだった。

先程のお返しとばかりに、武装のクローで攻撃する。

「ジエネシッククロー！！」

対するなのはもクローを装備し、ヴィヴィオの攻撃を受け止めた。スピードや威力は双方変わらず、フュージョンしたことで互角の格

闘戦能力が身につけている。

しばしの間、クローによる打ち合いが続いた。

ヴィヴィオは不意に魔法陣を展開、拳をガイガーに叩きつけるように突き出し――

「セイクリッドクラスター！！」

放たれた魔力弾が爆散し、小型弾殻をなのはに向かってばらまく。小型弾殻一つ一つは強力な破壊力を持っている。

「ストレイトバスター！」

なのはが撃った反応炸裂魔力弾が、セイクリッドクラスターを相殺して爆発する光の連鎖が周囲を彩った。

埒があかぬ、な……

パルパレーパは眼を細め、舌打ちする。

「聖王ヴィヴィオよ、真の力を解放するのだ！ でなければその『敵』は倒せん」

（……真の、力？）

なのはが怪訝そうにガオファーを見た。ヴィヴィオは頷くように頭を動かした。

「わかった」

……ママ、いくよ。私の全力全開を――

「ヴィヴィオ！」

なのはは、あることに思い至った。

ガオファーが複製されているという事は……当然あれも――

その推測を裏付ける様に、ヴィヴィオが叫びを発した。

「ガオーマシンー!!」

遙かな声が空間を貫き、ガオファーのサポートマシンを呼び寄せるのだった。

第五章 母と娘 破壊神を喚ぶものたち!! (後書き)

ついに解き放たれた、究極の破壊神!

カインの遺産は高町なのはにいかなる力をもたらすのか……
そして、ヴィヴィオは!?

次回 第六章 悪魔王誕生!!! に続く!!

第六章 悪魔王誕生！！！！

西暦2006年。

GGはギャレオンの不在に際し、それに代わるメカノイドの開発に着手した。それが、ファントムガオーノガオフアーである。

そして、勇者王に合体するガオーマシンも新たに開発されることになった。

新型ガオーマシンは宇宙での活動も視野に入れた高性能のマシンとして、エヴォリユダー凱をサポートするのだ。

ガオフアイガープロジェクトはハードウェアに関しては順調に進んだが、問題はファイナルフュージョンに必要な新しいプログラムが正確に作動しないことである。しかし。バイオネットにより遺伝子操作を受けて誕生した天才少女・アルエットの能力により、FFプログラムは無事に完成した。

その年の末。バイオネットが新型ガオーマシンとガオフアー、さらに卯都木命の身柄を奪うという事件が起こった。

必死の探索の結果、翌年1月、香港の決戦において凱は強奪されたガオフアーとガオーマシンを取り戻す。命を救出するためバイオネットの要塞に突入した凱はアルエットの協力を得て、ガオフアイガーに初フュージョンする。

ライバルだった鰐淵シュウの最後を見届けた凱は、バイオネットへの怒りとともに、ファイナルフュージョンを敢行、初めての合体を

成功させた。

ガオガイガー同様、フュージョンの成功は極めて難しいとアルエツトは指摘したが、凱は勇気で困難を乗り越えたのだ。

新たな勇者王は一撃のもとにバイオネットの浮遊要塞を撃破。命とアルエツトは悪魔の手から解放される。しかし、アルエツトはギムレットの攻撃を受けた影響で、凱たちの記憶と、天才的な能力を失い、普通の少女に戻っていたのだった――

ガオファアの周囲を飛び回る新型ガオーマシンたち。

スペースシャトルに酷似した蒼き噴進機・ライナーガオーイー、漆黒の翼もつ全翼型飛行機ステルスガオーイーイー、二連のドリルを備えた突撃重戦車ドリルガオーイー……レプリジンとして甦ったガオーマシンは、セイクリッド・ガオファアを守るかのように飛び交っていた。

「――いくよ……」

ヴィヴィオはファントムチューブを機体より放つ。それは、ファイナルフュージョンに必要なガオーマシンのガイドシステムである。

新型ガオーマシンが呼び出されたのを見たはやては、素早く後続艦に命じる。

「こっちもジェネシックマシンを！」

なのはからも同様の要請が届き、即座に艦のハッチが開かれる。

「——ジェネシクマシン解放！」

獣を模した五つのマシンが各艦艇から飛び出す。

孟き黒鳥・ガジェットガオー、巨爪を備えし土竜・ストレイトガオー&スパイラルガオー、滑るように宙を行く鮫と海豚・ブロウクンガオー&プロテクトガオー……緑の星で生まれたガオーマシンの原型たち。

スター・ガイガーを中心に、フォーメーションを組んで飛ぶ。
待ち望むのは合体の刻。

「いこう、レイジングハート!!」

《Yes , My Master》

「ファイナル……フュージョン!!」

なのはが高らかに叫んだ。

同時に、ジェネシクマシンたちが所定の軌道に乗る。

そして、スター・ガイガーから竜巻が巻き起こった。

それこそ、最終合体の合図だ。

ヴィヴィオもまた、ファイナルフュージョンに移行中であつた。

ガオファアの周囲を、光の帯が半球形に巡つた。

これは、ガオガイガーのEMトルネードに代わる、ファントムチューブである。物理的な防御力ではEMトルネードに劣るが、電子的・情報的な遮蔽性は向上している。その、ファントムチューブにガオマシン達が入入した。ヴィヴィオはすかさず、ファイナルフュージョンの新機構、プログラムリングを投射する。

ファントムリングはガオマシン制御プログラムの総称だが、ファイナルフュージョン制御プログラムと軌道安定ガイドとを光学的に形成したものだつた。これにより、ガオマシンへの負荷を減らし、より確実なファイナルフュージョンが可能となつたのである。

それにしても……

本来、ファイナルフュージョンには第三者の操作が不可欠である。ガオファイガーの場合はFF承認とプログラムドライブの起動が、ジェネシックス・ガオガイガーはGクリスタルのコンソールからジェネシックスドライブを起動させねば、合体に移れない。強大な力を使用するために必要な一種のセーフティーにあたるのだが、なのはもヴィヴィオも己だけでファイナルフュージョンを行っている。

何故か。

簡単である。

ガオファイガーを複製する際、アベルはプログラムを改変した。ソルダートとジェイアークを創造した彼女にとって、地球人の開発したプログラムを変えることなどたやすい事だったに違いない。承認を必要としない、搭乗者自身の意思で（最も、凱の時は強制的に行わせたのだが）フュージョン出来るように作り替えた。

対して、ガオガイガーはレイジングハートがギャレオンの了承を得て、ファイナルフュージョン・プログラムを書き換えたのである。もともと、なのは達の使う魔法はコンピューターのプログラムに近いため、言語同士の親和性も高い。また、フュージョン後もなのはが魔法を発動できるよう、レイジングハートが独自に式を組み立てた。そうすることで魔導師の高いポテンシャルを活かせることができるのだ。

「両機、フュージョンをはじめました！」

いよいよ、二つの機体が変形を開始し出す。

「これが……ファイナルフュージョン」

はやては息を吞んで見つめた。

「ふつ。貴様、愛児に対し本気でその力を振るうつもりか？ 破壊神の力も辞さぬのではもやは母親でもない。高町なのは、貴様もはや《悪魔》と呼ぶ存在よ！」

「……悪魔でもいい」

かつてヴィータにも告げた言葉をなのはは呟いた。

「ヴィヴィオを救い守れるのなら、どんな力も受け入れる!!」

「くくつ、破壊するのみの力で以ってなにを救う？ 自らの手で娘の命を断つか……それもよからう」

パルパレーパは嘲笑した。

「それとも、我が娘に殺されるか——」

彼はガオファーに視線を向ける。ケミカルボルトにより、ヴィヴィオはいやがおうにもなのはと戦わざるを得なかった。

如何に葛藤しようと、ファイティングメカノイドの力を使わなければならぬのだ。かつて愛した、いや今も愛する母親へと——

「私は管理局と共に傍観に徹させて貰おうか……」

パルパレーパが介入すれば、はやて達にはひとたまりもないだろう。だが、彼は嗜虐心から母娘同士の戦いを愉しむことに決めたのだ。

（負けない……必ずヴィヴィオを救ってみせる!!）

燃え上がるなのはの心。

（ママ……）

ヴィヴィオは痛みに泣きながら、ファイナルフュージョンを行った。

「ごめんなさい……」

ガイガー／ガオファアの両腕が背面に移動し、固定される。

——ドリルガオーイエーがガオファアの脚に連結、ガツチリと接合した。

土竜の姿をした、スパイラルガオーが右脚に、ストレイトガオーが左脚にそれぞれ合体していく。

パシユツ……廃棄音をたて姿勢制御バーニアが離脱し、ライナーガオーイエーが連結フェーズに移行。ガオファアの胴体を貫通し両肩を形作る。

プロテクトガオーとブロークンガオーはバクンと割れて変形し、ガイガーの腕部口に突入。内部で連結合体して左右の肩を構成した。ステルスガオーイエーがガオファアの背後から覆い尽くす。

黒鳥ガジェットガオーは逆さまになってガイガーの後背部に取り付き、前脚を肩部にたて、我が身を固定するのだった。

そして、ガジェットガオーから上腕部が展開し接合される。回転しながら鋭い爪を備えた手が表れる。

ガイガーもライナーガオーイエーからせり出した上腕部と下腕部を火花を散らして合体させ、逞しい両拳を完成させた。

頭部を保護する冑とフェイスガードが顔を覆う。ジェネシックは髪にも見えるエネルギーアキュメーターを生み出した。なのはの魔力光の色をしたそれは燃料電池、いわばベルカ式のカートリッジのような役割を果たす。

正常に合体を終わらせたガオファイガーの内部のメカニックが、目覚ましく動き出した。排熱が微かな蒸気として漂う。

ガオガイガーの背面部、ガジェットガオの、長大な尾の様な頸部がゆるやかに身をくねらした。

互いの魔力光を含ませ緑の光を輝かせるメカノイドたち。

「ガオファイガー!!」

「ガオガイガー!!」

《Fusion system・Complete》

だが、まだ変化は終わらない。さらなるパワーアップを両者は図った。

「レイジングハート、魔力変換!!」

《Stand by・Lady》

ガオガイガーの足元で魔法陣が展開する。ギャレオンの頭部を除いた各機関が魔力を受けて変形していく。

「ガジェットツール!!」

ガジェットガオの頸部が分解し、瞬時にガオガイガーの左手と融合・合身する。

本来は形態を組み替えることで様々なツールに換わる機構だ。その、パーツがツールのひとつボルディングドライバーに似た形状へと組み上がっていく。

これこそ、なのはがフュージョンしたガオガイガーの超巨大デバイス——ギガンティスハートである——！！

《All Complete》

魔導師の杖、というよりかは長槍のような形態である。

「レijingグハート、ガジェットフェザーを」

ガジェットガオー部から八枚の羽根が展開した。さらにそれは魔力変換により、高機動に優れた翼へと変わる。

「アクセルフェザー——！！」

桜色の翼を拡げ、変化したジェネシク・ガオガイガーが咆哮した。

「ナノツ……ガイッ……ガー——！！」

究極なる破壊の力……受け継がれし遺産……そのすべてを越えて誕生した、勇者王進化形態。

あらゆる存在を無に還す悪魔の王——即ち、NANOHA FUSION GAOGAIGAR……ナノガイガーである。

その威容に誰もが目を見瞠らずにはいらなかった。

「……忌まわしき悪魔め」

パルパレーパの片眉がしかめられた。

「だが、聖王の娘もまた貴様と同じく魔力変換により強大な姿を手に入れている。思い上がるのもそれまでだ……」

ヴィヴィオのフュージョンしたガオフアイガーも、進化形態になっている。

全長31.5メートルの巨体を虹色の光が包み込み、聖王の鎧を構成する。形状もより重厚に変型し、背にはステルスガオーIEIEIが変化した二枚の大翼が羽ばたいた。

「エヴォリアルウルテクエンジン、出力80%……さらに上昇！
！」

EI-01を倒した弾丸Xを参考にした、Gストーンのパワーを限界まで放出するシステム。それを凱の意思でコントロールできるようにした機能がガオフアイガーのエヴォリアルウルテクエンジンである。

瞬間的な出力はガオガイガーを遥かに凌ぐが、長時間のエネルギー解放はGストーンの機能維持すら危うくする両刃の剣でもあった。しかし、ヴィヴィオはそれに構わず出力を上げ続ける。なのはに勝つには生半可なパワーでは足りないからだ。共に暮らしてみて、そのことは充分に熟知しているヴィヴィオだった。

「……ヴィオツファイッガー！！」

VIVIO FUSION GAOF AIGAR……即ちヴィオフアイガーがここに顕現した。

ナノガイガーは頭ひとつ分、ヴィオフアイガーよりも抜きん出ている。だが、大きさが違っていても、油断はならない。

ヴィオフアイガーが秘めた力を、まだなのはは知らないからだ。

「ヴィヴィオまで……」

その巨軀を見たアースラのクルー達は、これから始まるであろう戦いに不安を隠しきれずにいた。

だが、は yet だけは親友の勝利を信じている。

(……なのはちゃん、頼んだで)

「「ブラウクン……」」

ヴィオフアイガーが非実体型のファントムリングを右手に発生させた。そして、ナノガイガーは既に発射モーションに入っている。

「ファントム——ムッ!!」

「マゲナムッ!!」

双方に撃ち込まれる拳は、両者の中間地点でぶつかり合い拮抗した。激突の余波で見えざる衝撃波がアースラの方にまで押し寄せる。

「っ!!」

相手に届かぬ拳を戻し、ナノガイガーが急進。ヴィオフアイガーに肉薄し、蹴りを放つ。

「く——」

ヴィヴィオは腕でキックを受け止めた。スパイラルドリルがヴィオファイガーの装甲を削る。

（くっ——近接戦闘は私の方が上のはず）

魔力がヴィオファイガーの腕に宿る。

ヴィヴィオは猛然と反撃を開始した。ベルカ式の魔力付与は攻撃の威力を数倍に上げる。

「たああっ!!」

「さすが、技のキレが良いわね……でも」

なのはは余裕でそれらの打撃を防いでいた。

「私を倒すには力が足りないよ」

「わかってる……ママと戦うには……全開の……フルパワーが必要だって」

ヴィヴィオはエヴォリユアルウルテクエンジンの出力を限界まで引き上げた。

機体の一部が負荷に悲鳴をあげるが、ヴィヴィオは無視する。

（砲撃こそ、なのはママに対する最大の敬意——）

ヴィオファイガーは数多の光球を生み出した。

「これは——なのはちゃんの……!!」

アクセルシューター。なのはが得意とする、誘導操作弾。

はやてはヴィヴィオがなのはとフェイトの魔法をかなりコピーしているという事に思い至った。

「八神隊長……あの誘導弾、大きさが――」

「でかい、な……」

アクセルシューターの大きさは人間がすっぱり入ってしまう程、巨大だ。

それが数百と浮かぶ光景は、美しくもあり、また恐ろしくもあった。

「シュート!!」

光球が一齐にナノガイガーに向かう。

ナノガイガーは移動を図るが、全方位からの攻撃により着弾は必至。少しくらいのダメージは与えられる、とヴィヴィオは踏んでいた。

動きを止めれば、一瞬の勝機がそこに生まれるはず。

ヴィヴィオは新たな砲撃のチャージをはじめた。光が伸ばした両手の先で輝きを増していく。

スターライトブレイカー……なのはの必殺魔法でナノガイガーを撃つつもりだ。

「これは……自動追尾型みたいだね」

なのはは冷静に防御態勢に移る。

「プロテクトシェード!!」

ガオガイガーのバリアの原型となったジエネシックの防御フィールドを四方に展開した。同時に爆発がナノガイガーを覆い隠した。

「む……」

パルパレーパに不審の表情が浮かぶ。

「アベルの話では、破壊神の防御は、ジエネシックオーラによる情報攻撃だったはず……」

ジエネシックガオガイガーが放つ防御フィールドは対遊星主用の技であり、いわばアンチウィルスのような働きをする。故に、プロテクトシールドは遊星主の身体を破壊してしまう効果を持っていた。

しかし、それ以外の物理／魔法攻撃への対応力は低いはずだったはずだ……

「なにがしかの改良を施してあるようだな」

レイジングハートは、プロテクトシールドに対物理／魔法攻撃に備え防御魔法の効果を織り込んでいた。《プロテクションEX》などより遥かに強固な防御力で、広範囲をカバー出来る。

アクセルシューターの被害は抑えられ、傷一つつかない。そして。

なのはもまた砲撃の準備を始めていた。

爆発の中から現れたナノガイガーに、ヴィオファイガーがスターライトブレイカーを解き放った。

「……デイベイン」

なのはがギガンティスハートを突き出し、唱えた。

「バスター!!」

ぐわっ――

柱のような砲撃が相手目掛けて発射される。

「っ……!!」

ディバインバスターGXは、ヴィヴィオのスターライトブレイカーに衝突。

光の飛沫がしぶいた。

「私の砲撃を、押し返している……!!?」

ヴィヴィオは驚愕し、慌てて防御に入った。

スターライトブレイカーはディバインバスターに飲み込まれ、ヴィオファイガーに逼迫する。

「プロテクトウォール!!」

かざされた左手から防御力場が放出された。

バリアにディバインバスターがぶつかる。その凄まじい衝撃にヴィオファイガーが吹き飛ばされそうになった。

「ぐあああっ」

バリアが、もたない……

「おおおおっ!!」

ヴィヴィオは右拳にGストーンとレリックのパワーを集中させた。

「ブロウクンファントム!!」

至近距離からの打撃。

魔力付与された勇者王の武装を、思いっきりデイベインバスターに叩きつけた。

「消し飛ばええ——!!」

崩れたエネルギーの奔流が、ヴィオフィガーを包み込んだ。星が破裂したような、まばゆい閃光が疾る。^{はし}

「ヴィヴィオ……!!」

なのはが叫んだ。

戦っていても、やはりその身を案じてしまう。

「うっ——」

爆発の余光が舞う中、ヴィオフィガーが傷付いた姿を現した。プロテクトウォール、聖王の鎧で致命的なダメージは避けたものの、無数の細かい損傷が装甲に見られ、右拳はヒビが走っていた。

GSライドは限界以上のパワー放出に疲弊し、ヴィヴィオの魔力も消耗が激しい。

だが、それでも彼女は戦うことを止めようとはしなかった。それが遊星主の命令だったから。

ケミカルボルトはほとんどヴィヴィオの身体に埋まっている。完全に入りきらないのは、聖王の鎧が「異物」として排斥しようとしているからだ。しかし、それでも浸蝕を食い止めることは出来ず、押し止めるのが精一杯である。

（遊星主の呪縛と戦えっっていても……私には）

ヴィヴィオはピア・デケム・ピットで語りかけてきた声を思い出していた。

声はケミカルボルトに負けず、戦えと言ったのだ。

（無理だ……身体のコントロールが……）

パルパレーパのナノマシンが彼女の神経細胞を侵し、肉体の制御を乗っ取っていた。

自我はあっても、身体は遊星主の操り人形に等しい。

（マ……マ……）

ヴィヴィオはナノガイガーを見た。

不思議とその、破壊神の貌は穏やかに微笑んでいるように感じられた。

（なのはママ、本当に私を助けられるの？ その——悪魔の力で）

もし、その疑問をなのはが聞いたとしたら、どう答えただろうか。大丈夫、と安心させるように頷いたのかもしれない。

（なのはママ……私、は——）

「何を手こずっている。悪魔王に容赦は要らぬ。貴様の力を全て使
って倒すのだ」

パルパレーパから叱責が飛ぶ。

「私の……」

ヴィヴィオが躊躇いがちに動き出した。

「なにか、まだ奥の手があるのね」

なのはは攻撃に備え、ギガンティスハートを前に突き出した。

「……来い」

ヴィヴィオが魔法を使う。

（召喚？）

魔法陣が浮かび、巨大な物体が転送されてきた。

「私の、最強ツール！」

「あれは――」

間違いない。レイジングハートがギャレオンから送られた知識の内
にあったものと同じものだ。

「そうだ。その、破壊神の力で悪魔王を倒すがいい」

パルパレーパが嘲笑う。

「——高町なのは、娘に倒されるのなら本望だろう……むう!？」

突如。パルパレーパ目掛け、光条が飛んで来る。

「奴らか？」

回避したパルパレーパは、アースラの方を向いた。
アースラから砲撃が来たのだと思ったが……

「いや、攻撃はその背後から——」

アースラの後方、白い戦艦が闇を裂いて登場した。

「ジェイアーク！ 追いついたか」

超弩級戦艦ジェイアーク。その威容を誇らしげに見せながら、悠然とアースラに並んだ。そしてパルパレーパに艦砲を合わせる。

「残念だが、パルパレーパ。貴様にのうのうと見物させてやる訳にはいかんのでな」

」は戦意ある声で告げた。

「ほう。欠陥品のソルダードが創造神に挑むか……面白い!」

バルパレーパの気が変わった。

「傍観者も時に退屈だな。ちょうどよい」

ケミカルフュージョン。

「アベルに代わり、貴様を処分してやろう。神に逆らった反逆者として、な」

「私もピサ・ソールへの障害となる貴様を放つてはおけんなのでな。ここで貴様を倒せばピサ・ソール攻略も時間の問題」

」は隣のフェイトに頷きかけた。

「うん。いこう、」

フェイトがバルディッシュを乗せた掌を差し出す。

」はしっかりとその手を握った。

「テラフュージョン!!」

重なる力。

巨大なるゴッドジェイダーが誕生する。

「貴様が創造神と言うのなら、ゴッドジェイダーは戦の雷神!」

雷光を纏いし巨神が、翼を拡げる。

「我がいかづちが貴様を焼き尽くす!!」

「やってみるがいい！　そして、創造神に刃向かう愚を思い知ることだ」

パルパレーパ・プラスは、ゆっくりと右手のメスを持ち上げる。

「来い、雷神よー！」

転送されて来たのは超巨大な鎚だった。

「マーグハンドー！」

鎚から離脱したパーツが巨手となってヴィオフィガーの腕に合体する。緩衝ユニットであるマーグハンドだ。勇者ロボ・ゴルディーマーグが変型したパーツだが、彼のAIはケミカルボルトにより封じられていた。

「ハンマーコネクトー！」

金色の鎚が、巨掌に握られた。

「ゴルディオン……ハンマーー！」

「ゴルディオンハンマー……！」

金色の粒子が鎚とヴィオフィガーを輝かす。ゴルディオンハンマーとヴィオフィガーのGストーンがリンクした事で凄まじいパワーが生まれ、それが余剰エネルギーとなって機体表面に溢れ出した

のだ。

「まるでヴィータのギガントハンマーやな……」

はやてはヴィオファイガーが装備した切り札にそんな感想を抱いた。だが、ハンマー型といっても、グラーフアイゼンとは性能はまるで異なる。

ゴルディオンハンマーの正式名称はグラヴィティショックウェーブ・ジェネレイティング・ツール。即ち「重力衝撃波発生装置」——重力波を造りだし、その中に置かれた物質を光子レベルにまで分解してしまふ、強大なるツールだ。

たとえば、ジェネシックの機体といえど例外ではあるまい。

金色の破壊神が、ナノガイガーに巨大鎚を見せる。

「これは……私でもちよつと不利だね」

《Yes , Master》

「でも、負けられない。いくよ、レイジングハート！」

なのははゴルディオンハンマーの迎撃体勢を取る。

「ママ。これで、最期よ——」

金色の破壊神が巨鎚を構えた。これで、決着をつける。

ヴィヴィオは涙と共に、悪魔王に立ち向かって行くのだった。

第六章 悪魔王誕生！！！（後書き）

ナノガイガーVSヴィオファイガーの戦いはまだ終わらない。
機動勇者隊と遊星主との戦いもまた……

次元世界崩壊の危機が迫るなか、勇者あるものたちの激闘。
そして、新たな仲間たちが参戦する！

次回 第七章 超魔王黙示録 に続く！！

第七章 超魔王黙示録（前書き）

執筆がすごく遅れて大変申し訳ございませんでした。

まさか歳越えちゃうとは……不覚の至りにございます。

言い訳するとなんかこういろいろございまして……と、ここできどくどしく言っても詮ないこと。読者の皆さん、すみませんでした。

m (——) m

できれば、当シリーズを年内に完結させて、残されたGG艦隊とかの話を書きたいなあ、と思っと思っていますがさてうまくいきますかどうか……

それにしても、strikers再放送にA・s劇場版と今年はなのはファンにとっては注目が高まりますねえ。

そうそう、ガオガイガーの合体シーン、テレビシリーズの見返したらすげえ（；´A`）ハアハアしますな！

サンライズさんはホライゾン二期やったらガオガイガー頼みますね

（^^）！

第七章 超魔王黙示録

普通の人間の目からすれば、それは数瞬の事としか認識できなかったろう。

その、瞬き程の時間に幾つかの現象が並行して行われたのだ。

——遊星主ポルトンの巨大な刀がスバルに振るわれ、ティアナの脳裏に最悪の事態がよぎる。

「く——」

スバルは強引に身体向きを変え、刀の軌道から脱出しようとする。打撃を前方に叩き込み、反動を使って後方の空間に自らを放り出す。そして自由落下により攻撃の回避を試みる。

風を裂き、ポルトンの刀が落ちるスバルを猛追した。

速く鋭い斬撃。

ティアナは誘導操作弾でスバルを援護するため、必死に弾道を計算した。

スバルもウィングロードを発動させ、対抗の構えを見せる。
ポルトンは音速に近い速度で武器を振り込む。そこから発生する衝撃波ですら敵には有効な攻撃となることを知っていたからだ。

「シュート！」

ティアナが魔法を撃つ。

スバルがウィングロードの上に立った。刀を跳ね上げるための一撃を放つモーションに入っている。

突如――ポルトンの姿が掻き消えた。

光学迷彩だ。

一瞬、スターズは標的を見失う。

スバルが感知した時には、既に横殴りの斬撃が迫っていた。

（しまった――）

凄まじい衝撃音が轟いた。

（スバル――！）

ティアナは悲鳴を上げそうになった。

だが、吹き飛んだのは、遊星主の方だった。

「これは……」

スバルは、眼を見開いて驚いた顔つきをしている。

彼女はポルトンの刀の側面に、何者かが蹴りを叩き込んだのを目撃していた。
その蹴りを食らったポルトンは、態勢を崩してビルに衝突し、転倒している。
迷彩は解除され、その手にあったひと振りは破壊されていた。いかに凄まじい攻撃か、威力を物語っていた。

「危なかったな、タイプゼロ！」

「この声——」

「あ、あんたは……」

あんぐりと口を開き、いささか間抜けな表情になって、ティアナが誰何する。

「よう、オレンジ頭。加勢に来てやったぜ、感謝しろよな」

照れ隠しの笑いを浮かべながら、スバルとよく似た顔立ちの少女がティアナの方を向いて言った。彼女の機械仕掛けの瞳には、困惑するスターズ2の顔がはつきりと見えているはずだ。

「ナンバーズ……」

スバルは自分を基に開発された戦闘機人を呆然と見た。

「No.9——ノーヴェ……」

赤い髪をなびかせ、ノーヴェはスバルの隣に跳んで着地。

「どついつことよ？」

と、疑問を発するティアナの背後から声がし、ぎくりとなって振り返ると――

「ノーヴェッたら、あたしもいるんだけどなあ……」

苦笑しながら現れた人影は。

「あんた、戦闘機人の――」

それはNo.6。セインであった。彼女は気軽な動作で手を振り、

「共通する敵と戦うんだ。せいぜい仲良くしようじゃないか」

性懲りもなく、ベルカの騎士が立ち上がり闘う姿勢を見せてきた。

それを認めた遊星主・ペチュルオンは嘲りも油断もなく、淡々とした動作で攻撃を再開する。

電磁石とスクリューから生み出す電磁竜巻が、騎士――ヴィータに襲い掛かった。

暴風、そして雷。

暴れ狂う龍の様に、ヴィータを飲み込まんとする。

（来やがれ――）

ヴィータはグラーファイゼンを手に闘志を沸き立たせた。

（今度こそ、奴の懷に）

防御魔法展開。

グラーファイゼンをラケーテン・フォルムに。

「いくぜ!!」

ヴィータが飛びかかろうとして。

「!？」

とつさに動きを変え、真横に移動する。

それまでヴィータがいた空間を、エネルギーの奔流が通過していった。

「これは……!？」

振り向く。そこに、誰かの気配があった。

「こいつは」

放たれた直射砲は電磁竜巻と衝突し、爆発を誘発した。

凄まじい轟音と強風がヴィータを揺るがした。

その影響で近辺の樹木が薙ぎ倒され、地形も変えられてしまっている。

「大丈夫？」

言いながら『砲』を抱えた娘がヴィータに寄ってきた。

「てめえ、ナンバーズの――」

険しい眼で見上げる。

少し眉根を下げながら、No.10……ディエチが、ヴィータが疑問に感じているであろう事の説明をしようとした。

だが。その時間は後にする必要となった。

「危ない」

防御形態で爆発のダメージを防いだペチュルオンが、二人の元に向かってきたのだ。

巨体に似ない速度は亜音速にも達していようか。

瞬速で間合いを縮め、腕のスクリューを振るう。

「跳んで――！」

「だあぁっ」

二手に跳躍し、攻撃を逃れる。直後、土砂が爆発したように爆ぜ、砂塵が乱れ舞う。

攻撃を躲した二人は距離をとって着地。体勢を整える。

「またくるぞ」

ヴィータは電磁竜巻に備え、防御フィールドを発動。

フェイトの様な電気系技能を持つ相手に対して張る魔法だ。

ディエチはイノーマスカノンを構え、チャージを始める。

ペチュルオンが両腕の電磁石とスクリューを回転させ、竜巻を発生させようと、した。
だが――

「結界!？」

突如、巨大な結界が、ペチュルオンを包み込み、電磁竜巻を阻んだ。

「これは……」

ディエチは知っている。これは魔法の結界とは違う。

「プリズナーボックス――」

と、いうことは。

「オットー!」

ディエチは仲間の名を呼んだ。驚くヴィータ。

二人の目の前に姿を現したのは、髪を短くしたボーイッシュな戦闘機人だった。

No.8、閃光の術師オットーである。

固有武装ステルスジャケットで隠れていたのだろっ。

戦況を見守り、情報を収集していたのだが、姉妹であるディエチの危機にはさすがに動かずにはいらなかったのである。

いま、オットーが使用した結果は先天固有技能・プリズナーボックス。対象捕獲用のISで、機動六課を翻弄した技能のひとつであった。

「助かった、オットー」

ディエチの言葉に頷く。

「でも、長くはもたない」

「おい、なんでお前達がいるんだよ。捕まったはずだろ」

まさか、脱獄してきたんじゃ……だが、それならば管理局員のもとに来る理由がわからない。

「それは――」

ディエチが口を開きかけた瞬間、激しい轟音を伴ってプリズナーボックスが歪み、撃ち破られた。

「オットー、どいて!!」

イノームスカノンの砲口が光り輝く。

ISへヴィバレル。

その破壊力はSランクの砲撃にも匹敵する。

いけっ――

放たれた直射砲は真つすぐに、遊星主の巨体を撃った。

ペイ・ラ・カイン。天海護。

攻撃と防御の力が、両者の間で拮抗する。

ラウドGストーンのパワーは、地下の岩盤すらも易々と貫く。その威力、それを怒涛の如く、護に向けて解き放つ。

少年はその力をバリアを張って防ぎ続けた。さきほどはどうか押し返せたが、カインも今度は限界を越えて力を引き出してきている。バリアを破る勢いの攻撃に、護は必死に抵抗した。

（ぐっ……このままじゃ、もたない）

防戦一方ではやられてしまう。攻勢に転じるチャンスがあれば……

「どうしたラティオ。苦しそうだぞ？ そなたの勇氣もこれまでに……な……」

カインは憐れむように、息子に声をかけた。

（ちくしょう……こんなところで、負けるわけにはいかないんだ！）

護は渾身の力を振り絞ってカインに抗った。

「——む」

カインは突然、護へ突き付けた腕を反転させた。背後からの襲撃を察知し、振り向きざまに攻撃を放つ。

その力と襲撃者の持つ双剣同士がぶつかり合い、火花が散った。

「!?!」

その状況に困惑する護。

「——スカリエッティの戦闘機人だな」

カインを襲撃した娘は無言のまま、交差した刃をカインのパワーに叩きつけた。衝撃に弾かれ、彼女の体が上空に跳ぶ。空中で体勢を変え、放物線を描いて護の側に着地した。そして、再び双剣を構え、カインと相對する。

「貴女は？」

「No.12・デイド」

そう、彼女は短く名乗る。

ジェイル・スカリエッティが創造した、戦闘機人。ナンバーズの末娘。

「——どうして、ここへ？」

「お前たちに加勢するためだ」

「でも——」

ナンバーズは管理局に捕らえられ、拘束されているのではなかったか。

「管理局に敗北した戦闘機人がなにゆえ、管理局に味方する？」

その問いに、デイドは殺気を込めた視線でカインに返した。

「……ソール11遊星主。貴様らを、倒す」

「神である我等に敵対するか。愚かな選択だ」

カインの言葉にも動揺せず、強い口調で言った。

「遊星主はすべて倒す。ドクターの無念を晴らすために」

「これはとんだ逆恨みだ」

『IS——ツインブレイズ』

問答無用。デイドは赤い双つの刃を構える。

「私たちの神はドクターただ一人……貴様たちなど邪神にすぎぬ」

「いいだろう、ラティオごと葬ってくれる」

カインは攻撃の意思を、力として解き放った。

——かろうじて。

キャロの発動させた魔法は、海水に落下する皆を衝撃から守らせた。

「フリード！」

「ギャウ……」

竜はキャロを乗せ浮上。

冷たい飛沫が一面に飛んだ。

「エリオ君は……！？」

急いで、パートナーの少年を目で探した。
広い海原、そのどこかに落ちたはず……

「あつ」

空に舞い上がったフリードの上から、キャロは海水が弾けるのを目撃した。

（あれは……ストラダの？）

だが、それは別の者が起こした衝撃だった。

（……！）

強靱かつしなやかな肉体の持ち主が、傷付いた少年を担いで空中に踊り出たのだ。

「あなた、は——」

その姿に愕然とするキャロ。
しかし、直後、さらに驚くことになった。

「大丈夫……？」

小さな声が傍からかけられ、キャラがビクッと背中を震わせる。

「ど、ど、ど……」

「落ち着いて」

長い髪を揺らした小柄な少女が、平板な口調で言った。

「ルーちゃん、一体どうして——」

頭が混乱しているキャラは冷静になれない。

「……」

少女、ルーテシアは俯き、なにやら言い出しかけたが、やはり口を閉ざしてしまう。

「ルー……ちゃん？」

不安な表情で問うキャラ。

「ガリユー、助かったよ」

一方、エリオは自分を海中から救い出してくれたガリユーに、素直に礼を述べていた。

「でも、どうして君たちが」

疑問が出るのも当然だ。

ルーテシアたちは次元犯罪者・スカリエッツィに協力して逮捕され、施設に収容されていたはずだ。

「それは……」

ルーテシアが言いかけた時。

「！」

上空の遊星主、ペリクリオが再び動きはじめた。

ルーテシアたちを敵の増援と認めたのか、エリオたちを完全に殲滅するためか。

ソルタリーウェーブを放ち出す。

「……あいつを倒すのが先決ね」

「一緒に……戦ってくれるの？」

コクリ、とルーテシアは頷いた。その頬が若干紅く染まる。

キャラは嬉しそうに、

「ルーちゃんありがとう！」

顔を輝かせるキャラに、ルーテシアは照れ臭いのか、ぷいと面を背け、

「……アスクレピオス」

キャラに応えずデバイスを発動させた。

「キャロ、僕たちも――」

「今度こそ……」

「ギヤオツ!!」

今一度。勇気ある者たちが、遊星主に立ち向かう。

砂塵を巻き上げてシグナムは立ち上がった。

突風が後頭部で結んだポニーテールをなびかせる。

――わが闘志、未だ衰えず。

その口許には、不敵な笑みさえ浮かんでいた。

「なあ、レヴァンティン。昔を思い出さないか……?」

《J a w o h l 》

「はるか昔の……ベルカの戦乱の時代を――」

古代ベルカ。聖王の位を求めて争われた覇権戦争の時代。

シグナムたち守護騎士は、主を護りあまたの強兵と戦い、恐るべき騎士たちと剣を交わしあった。

そんな過去の自分を思い起こし、シグナムが愛剣に語りかける。

「この程度の敵にやられては、かつて、わが剣に斃れた者たちも憤激しよう――」

自嘲気味に笑う。

「《ヴォルケンリッター》の主将……烈火の将はこれほどにも不様な様態を見せる騎士だったのか、とな」

そうとも。

主はやてと、いつか撃ち破ってきたあまたの騎士たちの名誉と誇りにかけても――

「このシグナム、必ずや勝利を御手に携えんことを……」

レヴァンティンを掲げ、誓う。己の力と、誇りと、主と仲間の信頼に。

「レヴァンティン、カートリッジロードだ！」

《Explosion!》

炎の魔剣の名の如く、火炎が渦を巻いて刀身に這い上がる。

「いくぞ」

《Jawohl!!》

疾駆。

風を裂き、レヴァンティンが唸りをあげる。

「はぁあっ！」

ピーヴァータはチェーンソーアームを巧みに操り、シグナムの斬撃に打ち合わせた。

速く、重い。

レヴァンティンをシュランゲフォルムに変えて攻撃するが、致命的な一撃を与えるには、程遠い。

「このまま小競り合いを続けていても……くっ」

いつかは敗北する。だが、確実に勝機を掴める「でかい一撃」があるならば――

（やはり……あれしかないか？）

シグナムの切り札とも呼べる魔法はある。

しかし、使用には難点があった。

（《集》ならば、奴を仕留められるとは思うが――）

シグナムが有する最大の直射魔法、《シュトルムファルケン》。その威力は、なのはの《スターライトブレイカー》にも匹敵するだろうか。

だが、問題は「チャージに時間がかかる」という事だ。つまり瞬時に発動させられない。

かつてフェイトと闘った時、彼女はこの切り札を出すべきか迷った。発動に時間がかかり、また命中精度はミッドチルダ式と比べると低い――

そのような条件から、高速機動ではシグナムをも凌ぐフェイトには

使えなかった。例え発射出来たとして、当たらなければ意味がないからだ。

一方、対「闇の書の闇」には安心して使用できた。それは相手の行動を足止めできうる仲間の存在と、その場から移動をしない巨大な敵だったからである。小山の様な「闇の書の闇」は、的がでかい故に命中精度を気にする必要すらなかった。

ピーヴァータも、動きは遅く、巨体であり、闇の書の闇と状況は酷似している。

しかし、魔力のチャージの間に攻撃されれば、闇の書事件時と違って、なのもフェイトもないシグナムには厄介だろう。

（だが、それでも……）

やるしかない。そんな決意を浮かべた瞬間、ピーヴァータがパイロドライバーをシグナムに向けた。重力衝撃波を放つつもりだ。

（——くっ）

シグナムは上空に飛び、回避しようとする。彼女がまさに空へ翔け上がった時だった。

爆炎の華が、咲いた。

ピーヴァータの前面に、いくつもの爆発が起こり、遊星主は後ずさる。

「この炎は……」

まさか、というシグナムの表情だった。

「へへっ。けっこう苦戦しているみたいだな！」

小生意気、とも言える口調で声が降ってくる。

「……！」

驚いたシグナムの顔を見て、彼女は面白そうに笑った。

「ま、アタシが来たからには、こんなデカブツには負けないだろうけどな」

シグナムの前に現れたのは、妖精の様な姿の少女。

「お前、なぜ……」

呆然と、シグナムは訊いた。

「それだけどな、じつは——」

炎熱の使い手たるベルカ式融合機——《烈火の剣精》アギトは、悪戯っぽくシグナムに片目でウインクしながら話し始めた。

……間一髪だった。

（プロテクションが間に合わなかったら……）

ただではすまなかつであらう。

ルネはまだ熱の立ち込めるなか、喫^{きつ}とピルナスを睨みつけた。

「あらら、本当にしぶとい子猫ちゃんね」

今度こそ仕留めたと思っていたピルナスは、意外そうな声で呟く。

「この程度でくたばっていられるかよ」

吐き捨てるように言い、ルネは戦闘態勢に入る。

イークイップ――

「おおおおっ！」

G ストーンの光を煌めかせ、彼女は跳んだ。

サイボーグボディに力がみなぎる。

G S ジェネレーターの超過駆動。ハイパーモードである。

サイボーグ用の《弾丸X》とも言えるそれは、強大なパワーが発揮される。これまでルネは怒りが頂点に達した時にしかハイパーモードに移行できなかった。つまり、自分では自在に制御出来ない機構なのだ。

しかし、今は《リオン・レーヌ》のサポートがある。

そして、ピルナスへの闘志は沸騰しかけているルネだ。

限界まで己の力を出さないと勝てない、という思いが、ルネをハイパーモード化させた。

（熱い……）

軽々と宙を舞い、ピルナスに接近する。

「ふん……悪あがきね!」

鼻で嗤ってピルナスは針を繰り出す。

「はあっ」

ルネに巨大な針が襲い掛かる。それを両腕で受け止めた。

「なっ」

「うおおお!!」

腕に、拳に、意識を集中する。すべての力を、一点に込める。

「砕けろおお!!」

獅子の咆哮。

そして、緑の輝きを宿した拳が、ピルナスの針を粉碎した。

「馬鹿なあ!?!」

動転するピルナス。

「食らえっ」

すかさず、体重を乗せた蹴りをピルナスの胸に打ち噛ます。

「ぐあああっ」

巨体が衝撃に吹っ飛ばされる。ピルナスは地面に仰向きに倒れ込んだ。

「はあはあ……」

ルネは荒い呼吸を繰り返している。苦しそうな顔に汗が流れた。

ハイパーモードは超パワーと引き換えに、ルネの身体に大きな負担を負わせる。

ヘル＆ヘヴンを使ったサイボーグ時代の凱同様に、機体に極端な負荷を強いるのだ。

さらに、ルネの場合は放熱機関が不完全な為に、莫大な熱量が体内に溜まる。かつて、親友のパピヨンが戦闘モードで無茶をしすぎるルネを、たしなめる事があったが、それはメンテナンスを受けねば、ルネの身は危険な状態になるからだ。

「だけど、こいつは、命を棄てる覚悟でないと倒せない……」

だからあえて、自分の機体が危なくなるのを承知でハイパーモードを選んだのだ。

「よくも……！」

激昂したピルナスが鞭を振り回す。

素早い動きで攻撃を避け、

（がら空きの脇腹へ――）

拳を放つ。

「ぐああっ……！」

ピルナスの苦痛の叫びにも斟酌することなく、ルネは打突を続ける。

「がああっ」

堪らず、遊星主は逃れようとした。
ルネはそれを追撃する。

「観念しな！」

わが身を庇う様に折れ砕けた右腕の針を前にかざす。
ルネはその腕へ打撃を与える。ピルナスの右腕は、砕け散り、破片をばらまいた。

「このっ……」

鋼の鞭がルネの身体に巻き付いた。

「ぐううつ——てめえ……っ！」

鞭はルネのサイボーグボディを締め付ける。物凄い力でルネの機体を潰そうとする。

だが、ルネもただのサイボーグではない。

「ぬああああっ——！」

Gストーンの力を呼び起こす。

「馬鹿な……私の鞭が……!？」

驚愕するピルナス。
その左腕が軋んだ。

ハイパーモードのルネからパワーが溢れ——ついに鞭を引き千切った！

「お前の負けだ！ ピルナス」

「ありえない！」

胸に魔力弾を受けながら、ピルナスは己が敗れる事を認めなかった。

「とどめだっ！」

最大の一撃を。

魔力で強化された拳を突き出す。

ピルナスの体が、爆発した。

「なにぃ！？」

直後、ルネは背後に攻撃を受けた。針が、刺さっている。

「……ピル……ナス！？」

「勝つのは神である私よ！」

元の姿に戻ったピルナスが、勝ち誇った笑みを表わにした。

彼女はルネに打たれたと同時にフュージョンアウトした。

パーティキュールがほとんど破壊されたため、巨大ロボ形態にはもうなれない。しかし、一瞬の隙についてルネの背後に移動できた。

「ぐっ」

再びピルナスの鞭がルネの首に巻き付く。

ハイパーモードにより疲労が激しいルネは、苦しげに悶えた。

「形勢逆転ね」

——ちくしょう……

ルネは魔法を起動させようとした。その刻だった。

「!？」

どこから飛来した光弾が、鞭を分断した。

自由を得たルネはすぐさま距離をとって構える。

「今のは……誰かいるのね!？」

管理局の者が援護に駆け付けたか、とピルナスは思った。

「この世界の人間に私が倒せるとでも……!？」

ピルナスの周囲を、無数の光弾が取り囲んでいた。淡く発光するそれは空を漂う風船を想起させるが、むしろ、無害なものではありえなかった。

「おっと、下手に近寄らないほうがいいですよ?」

知らない声が忠告してきた。

「お前は――」

サーフボードに似た物体に乗った娘が、ルネの目の前を飛んでいた。

「フローターマイン……」「浮遊する地雷」ってどこっすかね。ちょっとでも触れればたちまち、ドカーン……っ！てね」

髪を後ろで束ねた娘が、ピルナスに向けて無邪気そうに言った。

「おい、お前――いきなりなんなんだ」

ルネが陰しい声で誰何した。

「危ないところ助けたのにひどいっすね」

「スカリエッツィの戦闘機人ね？」

ピルナスがすぐさま、正体に感づいた。

「そうっす。あたしはN o . 1 1、ウェンディ」

と、名乗ってから、

「お姉さん、遊星主に苦戦してるんですよ。ここはあたしと協力して――」

「横からしゃしゃり出て人の獲物かつさらおうつてのかよ!？」

嫌悪感を隠そうともせず、ルネはウエンディを睨んで言った。
ルネはスカリエッツィの情報を管理局で見ている。
それだと思ったのは、

(こいつらはバイオネットの連中と同じだ……)

人の生命を弄んできたスカリエッツィを、ルネは彼女の身体をサイボーグに改造したラプラスやメビウスと同種の悪魔として、憎んだ。
だから、その創造物であるナンバーズを見やる目も、バイオネットの獣人やメタルサイボーグに対するものと変わらぬ。
蔑視の対象だった。

「こいつはあたしが倒す敵だ。関係ない奴は消えな!」

「ところが、そうでもないんすよねえ……」

「なに?」

「ほほほっ! どっちでもいいわあ。狩る子猫が二匹に増えただけ——」

おっと。早くも敵認定すね。望むところっすよ!
ウエンディは不敵に笑みを零した。

「おい、どういふ——」

問い質そうとしたルネの言葉が終わる前に、ピルナスが動いた。

「げげっ！」

ウェンディは驚愕した。

フローターマインの重囲を押し切って向かって来る。

空間にばらまかれた反応弾は少しでも衝撃を与えられれば、瞬時に爆発する。その際の破壊力も高いものだ。

しかし、ピルナスは構わずに突進してくる。

当然、次々に反応弾が誘爆していくがそれでも遊星主が停まることはなかった。

「捨て身……！？」

「てめえ！」

光と熱の咲き誇る間を突き抜け、二人に向かう。

「これなら――」

ウェンディがライディングボードから砲撃を撃った。

エアリアル・キャノンだ。

「やった！」

砲撃は、命中した。ピルナスの肩が弾ける。

「いや……待て！？」

ピルナスは怯みもせず間合いを狭め、ウェンディに火炎を放つ。

「うわぁっ」

ライディングボードで炎を防いだウェンディが、逃げるように後退した。その顔には困惑が浮かんでいる。

「撃たれても平気っスか!？」

「ぐ——ピルナス、お前は死ぬ気か」

「ふっ……」

鞭でルネを打ち据え、ピルナスが感に堪えた様に告げた。

「どれほど傷つこうと、私達は負けない。なぜなら、私達にはピサ・ソールがあるのだから!!」

「なんだと……」

「ピサ・ソールの光ある限り私達ソール11遊星主は不死身……そう、有限の命しか持たない貴女たちが、無限の再生力をもった私達に勝つことは絶対に無い!」

ルネは歯を食いしばり、ウェンディは動揺している。

「私達は神なのだから——故に、貴女たちの敗北は定められし運命……」

高い哄笑が、ルネの不快を煽るように響き渡った。

「何が神だ……ならば再生する片っ端から、あたしがぶち壊してやるよ」

ウェンディの視界で、《獅子の女王》が獐猛に牙を剥いた。

追い詰めた――

獅子王凱はそう思った。

遊星主プラスは凱の攻撃を巧妙に避けながら、逃げるかの様に移動している。それを追って駆ける凱。

と、突然、樹々の葉を蹴散らしてプラスが制止した。

（観念したか……？）

自然豊かな景観のなか、凱はついに追い詰めたのだと、そう思った。しかし、それは逆であった。

（ここは――）

周囲の地形には見覚えがある。緑の色も優しい、ベルカ自治領の光景は数日前に目にしたばかりだった。

（そうだ、あの――）

凱の思考を遮るように、プラスがミサイルを発射した。

「はあっ！」

防護の魔法がミサイルを逸らし、凱の後方に墜落する。

プラスはまた逃げ出した。
凱が疾走する。

「待てっ」

そこで、ガオーブレスから警告が告げられた。

《It warns》

「なんだ……!？」

《A stretch of refuge is not completed from this》

「っ……!」

聖王教会施療院を含めた地域の一般人の避難がまだ終わっていない、
というのだ。

（あそこには命が……）

情報によると、健康な民間人の退避はほぼ終了しているが、問題は
数百人居る入院中の患者たちである。避難先の受け入れ体制がな
なか整わず、素早い移動が出来ていない。

重病患者は特に扱いも難しく、最新の医療設備を完備した病院を各
地、各世界に緊急手配しなければならず、医者たちもてんやわんや
であった。

そして、そんな取り残された患者のリストには、卯都木命の名も入
っている。

凱は焦燥感に駆られていた。

（くっ……下手な戦い方をしたら、逃げ遅れた患者たちを危険にさらしてしまう……！）

プラスはむしろ彼らを巻き込むように動けばよかった。いかに無関係な人間が落命したとして、遊星主は痛痒も感じない。民間人を盾に取られ兼ねない状況は、凱を苛立たせるのだった。

（こんなときに、デイベイディングフィールドに奴を閉じ込められたら……）

凱の防御魔法は空間湾曲を再現し利用していたが、デイベイディングドライバーほどに広範な使い方は無理だ。

ならば、ここは何としても遊星主を人々に手の届く範囲へと入れさせてはならない。

凱は跳んだ。いや、飛んだ。

風を切ってプラスの頭上を翔け抜け、医療院のある方向を守るように立ちはだかった。

「貴様は絶対にここで食い止める……いや、倒す……！」

闘志を燃えたたせ、相対する。プラスはそんな彼にビームを撃ち込んだ。

「プロテクトガード……！」

防ぐ。

それを意に会さず、プラスはミサイルを発射。

「うおおっ」

音速に近いその弾頭へ、凱は跳躍して追い付き、魔力を蓄えた右拳をぶちあてた。

腹を叩かれたミサイルは「く」の字に折れ、墜落していった。――

「しまった！」

ミサイルは森林と森林との間にある草地に落下し、爆発が起こった。その爆風で近在にあった古い建物が破壊されてしまう。それはベルカ領でも年代物の騎士の館で、現在では史料館のような趣になっている。

幸い管理者は避難した後だったため無事だったが、残念ながら歴史ある品々は喪われてしまった。

それらは後日に判明したわけだが、いま、凱は己の片手落ちだと青ざめたのである。

もし、建物に人がいたら、悔やんでも悔やみきれなかっただろう。

「くっ……」

次から、奴が撃ったミサイルは、誰かがいるかもしれない場所に到らないうちに、全て破壊しなければ――

「俺は超人エヴォリユダー、そして魔導師だ。ここでみんなを護る力があるのは俺だけ……ならば、絶対に負けてはならないんだっ！」

遊星主事件の渦中、聖王教会騎士団は医療院を中心にベルカ一帯の

警護を、管理局地上部隊は民間人の移送及び護衛を担っていた。遊星主以外の次元犯罪者へも対応を迫られているため、どこも人手不足が言われている。機動勇者隊の者に加勢したくとも、なかなかうまくいかないのが管理局の悩みだった。

「っ!!」

プラスがスピアーを突いてきた。目にも止まらぬ速さの突きだ。凱は槍撃をバリアで受け止めつつ、光弾を撃つ。が、それはプラスのシールドに弾かれる。

「ぬう……」

攻めあぐねる凱が舌打ちをする。

——その時、だった。

「戦えるのは、貴方お一人だけではありませんよ!」

声がしたのと同時に、流星のように飛び込んできた影がある。

「君は!？」

誰何に応えたのは、影が放った蹴りだった。

「たあっ!!」

凄まじい一撃であった。食らったプラスの巨体が、森のある方に吹き飛んだ。

バキバキと、樹木が砕け折れる響きが轟いた。

「援護に参りました、勇者凱」

凱の前に降り立った女性が、生真面目な表情で言った。

「そいつは有り難い……君がいればとても心強いな、シスターシャツハ」

聖王教会シスターにして騎士。古代ベルカ式の魔法を受け継いだシヤツハ・ヌエラであった。

「さあ、共に邪悪なる敵を討ちましょう」

勇ましくシャツハが構える。その手には双剣型デバイス《ヴィンデルシャフト》。

「ああ――」

立ち上がったプラスが、反撃の動きに出ようとしている。二人は隙なくその瞬間をうかがった。

『大丈夫よ……凱。勇気ある限り、貴方が必ず勝つわ』

プラスが猛烈な勢いで間合いを詰めてきた。

（くる……！！）

プラスがミサイルを連続的に発射した。

「数が多い……！」

「いえ、打ち落とします」

凱とシャツハがミサイルたちを破碎していく。

「だめだ……間に合わ——！？」

「あつちには、医療院が……」

間に合ってくれ。

凱が疾駆する。

早くあれをどうにかしないと……！

しかし、凱の祈りも虚しく、ミサイルは宏大な敷地をもつ聖王教会
医療院の一画に着弾し――

「命おおお！！！」

勇者が絶叫した。

奇跡が起こったのは、それからだ。

『大丈夫よ凱……私は大丈夫……』

「命……？」

爆発の衝撃は医療院を揺るがした。咄嗟に聖王教会の騎士たちが発動させた結界により、どうにか死傷者をださなかった。

医療院は倒壊は免れたけれど、ひび割れや揺れによる転倒などが発生したのだが、大事にいたらなかったので重畳と言えよう。

さて、一人の患者が治療を施されていた一室なのだが……。

部屋のガラスが割れ、棚の備品が幾つか床に散乱している。

患者が寝ているはずの白い寝台のなかは、からっぽだ。

彼女は、その傍らに立ち、穏やかな相貌で彼方にいる恋人に意思を送り込んでいた。

『私は無事よ、凱……』

そう、心で述べた命の額には、不思議な光が点っていた。

いまこそ、覚醒の刻がきたのだ。

「神話の終焉が、始まる……」

命の声が、確かな予感に震えていた。

（これで……ママとの戦いを——）

黄金の鎚が輝いた。

（終わらせるんだ！）

全てを終わらせるために。

ヴィオファイガーはゴルディオンハンマーをナノガイガーにうち振るった。

「光になれえええ——」

それは慟哭ともよべる叫び。

ゴルディオンハンマーがナノガイガーを粉碎するために発動する。

ナノガイガーはギガンティスハートを掲げ、

「プロテクトシールド！」

防御フィールド発生。さらに加えて——

「レイジングハート、ジェネシクアーマーとプロテクションを全開に！」

《Yes My Master》

ジェネシクアーマー、プロテクトシールド、プロテクション、機体を守る三重のコーティングを形成させた。

そのナノガイガーの防御フィールドとゴルディオンハンマーがぶつかって、光が乱舞した。

「くっ……」

さすがに三重の防御層を一瞬で分解は出来ず、ゴルディオンハンマーの破壊力はナノガイガーにまで届かない。だが、少しずつだが、表層から防御フィールドを削り取っていき、ナノガイガーを包む力場が揺らめいた。

「でも、それだけでは足りないよ、ヴィヴィオ」

「うおお、ウルテクパワー全開——！！」

残された力を全て注ぎ込むかのように、リミッター限界を遥かに超えたパワーをゴルディオンハンマーに回した。金色の光が輝度を増す。そして凄まじい量のエネルギーを得た巨鎚は、防御フィールドを断ち割るようにプロテクトシールドの盾に穴を開けた。

「このまま……本体へ！」

「ヴィヴィオ、貴女の攻撃では私を倒せない。それを証明してあげる」

ナノガイガーが右腕を前に突き出した。突出してくる黄金の破壊鎚に向かって——

「なっ……！？ ゴルディオンハンマーに」

五指を拡げたナノガイガーの右手が、なんとゴルディオンハンマーの頭に押し付けられたのだ。

「何を……！？」

ヴィヴィオは惑乱した。

重力子の波動は順次、ナノガイガーの防御力場を光子に変換し続けている。

防御フィールドが崩壊した時、直接ゴルディオンハンマーの威力がナノガイガーに襲い掛かるだろう。

「貴女にゴルディオンハンマーがあるように、私にも『これ』がある……！」

ハンマーヘッドに触れた指先が金色の光を放った。

「ゴルディオンネイル……！」

それはG G Gの開発したゴルディオンハンマーの原型となった、ジエネシツクガオガイガー専用ツールであった。その名の通り、ジエネシツクガオガイガーの十指の先端に装備されている。重力衝撃波により触れた対象を局部的に破壊するのだが、地球の技術で再現する際には、さすがの獅子王麗雄博士らも小型化できなかったものであった。ゆえにゴルディオンハンマーはあのような超巨大なツール（それもオプシオン）になってしまったのだ。

そのかわり、ゴルディオンハンマーは出力や分解範囲が大きく、ゴルディオンネイルの方は局部的にしか使用出来ないため、広範囲を破壊できない。

なのはは、エネルギーアキュメーターに蓄えられた力を用いて瞬間的に出力をヴィオファイガーに凌駕するレベルにまで引き上げた。

「あ……あつ……!?」

ヴィヴィオが瞠目した。

「Gストーンは勇気をエネルギーに変換してくれるの、それは同じGSライドを搭載した機体に乗っている貴女ならわかるわよね？」

なのはが静かに、諭すように、語りかけた。

「だけど、勇気がなければ、それは普通の石にも等しい……」

ゴルディオンネイルが、鎚の進攻を押し止めた。

「ヴィヴィオ、いまの貴女のなかにあるのは勇気じゃない。不安、絶望、恐怖……そして憎しみ」

なのはが一喝して叫んだ。

「そんな、マイナスの思念では、Gストーンは応えてはくれない！」

勇気——生きる力の源、命のほとばしり、魂の熱さ。プラスの思念こそがGストーンを輝かせられるのだ。

「だから——！」

ゴルディオンハンマーに、ナノガイガーの爪が食い込んだ。

「Gストーンの真の力を発揮できる私に、貴女は勝てない——！」

ナノガイガーの逆撃。

「勇気ある限りGストーンは無限のエネルギーを与えてくれる。これが私たちの持つ、絶対勝利の力!!」

怯えて自暴自棄に陥ったヴィヴィオには、娘との戦いに全ての躊躇いと迷いを振り切ったなのは……ナノガイガーを越えられない。

「ゴルディオンハンマーが……」

突き立った悪魔の爪を起点に、光と化していく。

「うわあっ……!」

ヴィヴィオはマーグハンドごとゴルディオンハンマーを分離した。

『感謝する……』

ヴィヴィオではない低い声が、ナノガイガーに謝意を伝えた。

『同じ過ちを繰り返すのは、もうごめんだぜ——』

声は、粒子となって消えていくゴルディオンハンマーを握る巨掌——マーグハンドから聞こえてきた。

それは、戦闘中に目覚めたレプリゴルディーマグの意識だった。

勇者ロボの一人、ゴルディーマグはゴルディオンハンマーの衝撃からガオガイガーを保護するために生み出された緩衝ユニットである。彼はかつて、三重連太陽系で遊星主にレプリジンとして複製され、レプリファイガーと共にキングジェイダーと闘った。勇者ロボの超AIといえど、パルパレーパの呪縛を脱するには時間がかかる。故に自らの意思に反する操作を受けた。

そして、再び彼は勇者ロボにあるまじき行動をとらされたのである。

しかし、それもナノガイガーによって解放された。

ゴルディオンネイルはゴルディオンハンマーを粉碎した。

光に分解されながら、ゴルディーマグは、なのはに礼を告げる。

『ありがとう……俺を救ってくれて……そして、さらばだ。異世界の勇者よ』

「さようなら……G G Gの勇者——」

『凱に……俺たちの隊長によろしく言っといてくれ。あと、ずっとあんたに助けてもらいたがっていたヴィヴィオとかいう娘……それも頼んだぜ』

ヴィヴィオの心の叫びをゴルディーマグはGストーンを通じて聞き取ったのか……彼女もまた遊星主の被害者と知りながらも、自由を封じられた彼にはどうすることもできなかった。

「ええ、ヴィヴィオは私が必ず救うわ」

『じゃあな。勇気あるお嬢ちゃん』

「貴方の言葉。絶対、凱さんに伝えます」

『……』

こうして。

レプリゴルディーマグは、ゴルディオンハンマーと共に消滅した。

「そんな……」

ヴィヴィオが愕然とする。

ナノガイガーはゆっくりとした口調で、言った。

「さあ——決着を着けましょう、ヴィヴィオ」

なのはの声が、決意を秘めて発された。

第七章 超魔王黙示録（後書き）

目覚めた卯都木命が獅子王凱に告げたこととは！？
そして、遊星主パールパレーパに立ち向かうソルダート」とフェイト、
その戦いの行方は！？

次回 第八章 「命ミコトを超える者！」 に続く！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0674t/>

悪魔王ナノガイガー 第四部・決戦編

2012年1月13日14時47分発行